

哈利發の都城となれり、

黒旗は白旗に代り、綠旗は志を得ずして、アリの黨機を視て起たんとす、マンスルよく此を知り、普く天下に索むれども、アリ黨は時にメッカに、時に保羅珊に、巧に踪迹を晦まして得られず、七百六十二年に至り、メシナに麻訶末といふ者ありて起りしも誅せられ、餘黨其弟イブラヒムをベツラに奉じ進んでクファを取らんとせしも亦敗死し、綠黨の志此に挫けたり、次てベルベル亞非利加に起り、七百七十三年メリボリの反ありしも、皆大事に至らず、七百七十五年マンスル復メッカに巡拜せんとして市外に殞し、訃報精達に達し、次子メーチ立つ、アベスの世保羅珊のバルメク族シャアフルありて至り謁し、其子カリド重用せられて宰相と爲り、此に至り嗣立の事に與りて益重用せらる、

バルメク家の起原

サラセンの起るや麻訶末教を以てす、羅馬皇帝の基督教を奉じて之と對抗する、素より其所なり、然るに基督教却つて偶像崇拜の誦を受け羅馬教皇皇帝の分離と爲り、シャル、マルテル西班牙の麻訶末教徒を防止してより基督教の擁護者

希臘帝國

と目せられ、羅馬教皇と相扶くるに至れり、抑羅馬帝國は東西分裂の後既に久しく、西帝國夙に滅びて羅馬は伊太利半島の一都府に過ぎず、東方向羅馬帝國の空名を存するも、前に伊太利を失ひ、後にサラセンの爲に亞非利加を奪はれし後は帝國の民は主として希臘種のみ、故にサラセンはチベリウス二世以後を、伊太利人はマリウス帝後を希臘帝と稱し、ヘラクリウス以後羅匈語亡びたれば、イサウリア帝統に至りて純然たる希臘帝國なり、伊太利は六世紀の後半ロンゴバルド其北部及南部を領有し、東皇帝の代官たるラエンナ外藩王は僅に半島の中部を保ち、教皇は之に頼りて羅馬府附近を有するも、毫も東皇帝より兵資を得ず、ロムゴバルド亦半島統一の力なく、フランクにしてよく東皇帝及ロムゴバルドに抗敵し得ば、教皇の之に依托するは自然の數のみ、偶八世紀に至り東方に毀像派起りて益教皇皇帝分離の歩を早め、教皇は東帝を離れて、フランク王はチエトンの蠻族に出て、羅馬帝となるに至りき、始基督教は偶像畫像の崇拜なきも文化の進歩に伴ひ、扮飾漸く起り、不知不識の間に基督、聖母、聖徒以下の像畫を用ひ、遂に東方の猶太、麻訶末諸教徒に、偶像崇拜にして眞神の教に非ずと難せらるゝに至

レオ三世と毀像派

り、イサウリア統起るに及び、亦東方の俗を採り、七百二十六年レオ三世帝令を領國に布きて畫像を用るを禁じたれば暴徒蜂起して吏員を殺し、或は猶太教徒の唆嘆に出づと爲し、或は哈利發エマドの賄賂によるといひて騷擾已まず、殊に希臘伊太利の動亂甚しく、羅馬教皇は魁首と爲りて帝を難じ、ラエンナ、ナポリの皇師を追ふに汲々たるロムゴバルドと連り、半島の帝權殆んど地に委せり、唯レオ帝は嚮にサラセンの入寇を退けて軍士の望を繋ぎしを以てよく武力を以て之を鎮壓し得たるのみ、帝は又宗教改革の外ユスチニアヌス帝以後始て法令を發し租賦の紊れしを整理し滔々として頽弛せし國勢を挽回して、更に三百年帝業の基を立つ、實に希臘帝國の首祖と謂ふ可し、然るに教界の士人皆其變法改宗を惡みて其治績を煙滅沒却せるは最憾む可きなり、

七百四十年レオ三世殂し、コンスタンチヌス五世立つ、勇敢にして、よくサラセン、スラヴ、ブルガリア人の入寇を防ぎ、七百五十年ロムゴバルドの爲に伊太利の皇領を奪はれ、羅馬教皇反抗して帝と絶ちてフランクによりしも、帝は父帝の遺志を紹述して屈せず、毀像令を斷行し、七百六十年三百卅八僧正を都城に會し、聖

コンスタンチ
ヌス五世

餐の圖の外一切の像畫を用ふるを禁じ、禁を犯す者は教會及皇帝の賊なりと決したり、但アンチオク、アレキサンドリアは既にサラセンの有に歸し、羅馬は教皇の下にあれば素より此議に與らず、而して國民僧侶皆之を難じ、誅殺徒請太多く、七百七十五年帝殂し、子レオ四世即位す、母は可薩可汗の女、故に又カザル帝と稱す、恰も是東にはアバヌ朝の名主マンヌル殂してメーヂ立つの日に當れり、

レオ皇帝神畫聖像破毀の令を布くや、羅馬教皇グレゴリは九十三僧正を會して毀像の非を決し、遂に皇帝と絶ち、羅馬府は帝祖アウグスツス以來七百五十年を経てまた自由獨立を復し、共和政治の機關を起せしと雖も、往昔の精神今存せず、高僧を大官に教法を政法に代え、教皇政治の端を啓き、半島亂れ羅馬衛守莫し、ロムゴバルド王リウトブランド之を見て、聖像擁護を標徽と爲してラエンナに入り、外藩王と連りてスポレント、羅馬に迫り、其子アストルフスは教皇、皇帝に反抗し、ラエンナを陥れ、ユスチニアヌス帝以來伊太利皇領の主たりし外藩王を滅ぼし、羅馬を威喝して降らしめんとす、府民嘆訴せしも聽かれず、教皇は皇帝の救を

伊太利外藩王
の滅亡

カロレンジャー
ン王朝の起

乞ひしも至らず、是より先クレゴリ三世は援をシャル・マルテルに乞ひしに、シャルルはロムベルド王と與にサラセンを防ぐを以て應ぜずして、七百四十年に殂落し、二子アウストラシアのカルロマン、テウストリアのビビン後を承けて、フランス國復分裂の兆あり、然るに七百四十七年カルロマンはモンテ・カッシノ寺に遁れ、ビビン獨父の後を繼ぎ、久しく虚器を擁せるフランク王に代らんと欲せしも、名正しからず人服せざるを恐れ、故に教皇ザカリアスの允許を求め、七百五十一年シルデリク三世王を廢し、メロヴィンジャン王家に代りてフランク王と爲る、カロレンジャン王室是なり、後來此空式を先蹤として教皇皇帝を制抑し、羅馬教會は帝國を監督抑御するの權ありと爲すも、實は教皇の大權ありしに非ずして、ビビン一時の權宜に出でしのみ、然も之によりて教皇とフランク王とは相親善し、七百五十四年教皇ステファンは親アルプス山を超えて王に見え、二王子カルロ、カルロマンを紳縉パトリキウスと爲して來援を請ふ、紳縉はもと唯元首の尊稱としてコンスタンチヌス帝に授け、後外蠻の諸強王に授くる榮爵と爲り、近くは東皇帝の外藩王之を冒し、より、教皇及羅馬府民は之を教會擁護の職と爲すに至り、此任あり、ビビン乃

ビビン小王と
教皇

大軍を以て南下し、二び戰ふてアストルフ王を屈して歳貢を約さしめ、スポントベチエンツムを威服し、外藩王の故領ラエンナ、ベントポリス(アンコナ、シニガリア、フアン、ベサロ、リミニの五市)を教皇に與へ、復興羅馬帝國の地と爲し、以て子孫經營の引と爲す、さきにシャル・マルテルの世にツリーング公國、ビビン、カルロマン分權の世にシニベシ公國相前後して皆滅びたれば、ビビンはボニファチウスをマインツ大僧正となし、七百六十年より九年の征畧を以てアキタニアを下して王國統一を圖り、七百六十八年に殂落す、史家稱してビビン小王といふ。

カール、カル
ロマン

ビビンに二王子カルロ、カルロマンあり、從來フランク國は常に東西(アウストラシア、テウストリア)分封して、日耳曼羅馬民族の相異より分裂の傾向あるを免れず、よりてビビン王は殂落に臨み、地を南北に分ち、カル、を北に、カルロマンを南に封じ、其禍を防ぐ、然るに王國と教皇との聯合は新に其ロムゴベルドとの交は古く、カールの従弟バプリア公タシロはロムベルド王デシデリウスの女婿なり、フランクの國母よりてカールの爲に亦ロムベルド王女を納んとす、カルロマン教皇と與に之を遮く、國母二王の間を調停し、カールには教皇擁護を誓はしめ、

ロムバルド王
家の滅亡

ロムバルド王と教皇とを和解せしむ、然るに七百七十一年カール王妃を離別して、デシデリウス怒り、カルロマンは教皇と合はずしてカールと反目し、次で暴に殞落するや、妃は二王子を携へて伊太利に奔り、デシデリウスは之を奉じてフランスの正統を争ひしも、故カルロマンの地は遂にカールに歸して、フランス國復一統せり、七百七十二年教皇ステファン殞し、ロムバルド、フランス兩黨後嗣を争ひしも、フランス黨アドリアノ一世教皇と爲り、デシデリウスはカルロマンの王子の爲に抹油を請ひて許されざるを怒り、教皇領を侵奪す、カール教皇の哀訴を納れて南下し、デシデリウスをバギアに攻む、城中食を積みて久しく下らず、カール長圍を築き、親羅馬に至り、教皇の紳縉と爲りて交誼を訂す、七百四十四年六月バギア陥り、ロムバルドの王子哀を東皇帝に請ひしも功無く、デシデリウスは寺院に退き、二百年來歐南の要地を占有せしロムバルド王家は遂に滅び、カール王はロムバルド王を兼ねて教皇と連和せり、蓋しフランス王羅馬教皇の連和は上世近世史の連鎖、政教兩界の鑰鍵にして羅馬帝國は之に由りて再び起り、教皇は此に因り歐南に雄視するに至り、羅馬帝の空名を擁せる希臘帝室はまた此間に關

カール王のサ
クセン征伐

與せざるなり、

カール王のフランスに君たるや、ロムバルド、サクセンは實に其二勁敵たりき、既に一を滅ぼす、勢他に及ばざる可からず、サクセン征服は王の偉業にして、又中歐史上の大事なり、當時サクセンの地はアイデルよりフルダ、エーラの會點に至り、ラインよりエルベ、ザアルに達し、分れてエストフレン、エンゲルン、オストフレンの三大部及びノルドリウチ部と爲り、一統の大君王なきも、公侯諸方に割據し、久しくフランスの患を爲す、カール王はカルロマンの殞後直ちに其征討に着手し、エレスアルクを陥れ、イルミンスル大廟を毀ち、シギアルクを攻め、地を拓くに從ひて基督教を宣布せしも、サクセンは寺院教會を以て敵の堡壘と爲して之を毀焼し、反抗太力め、王亦多事にして、且征し且休みしが、七百七十七年バデルボルンに近傍の諸酋を徵集して、始めてフランス國會をサクセンの地に開く、サクセンの勇將オチキンド公は舅薩馬王に奔る、王サクセン既に服すと爲し、翌年西班牙を伐ち、ガラゴザを圍む、時恰もアフダルラーマン亞非利加より至りて、ユルバグに據れり、然るにオチキンド虛に乗じてサクセンを煽動し、フランス國會に震駭

す、東フランク、シュアベンの徴兵よく之を屈せしも、王外に在り、聞きて大に驚き退き、ピレナイ山のロンセスグル嶺にてバスク族の要撃を受け、大に敗れてかへり、翌年ア、川のロホルトにてサクセンに勝ち、七百八十二年國會を開き地を行政區に分ち、基督教を布き、歸順の貴族を分封して、サクセン全土を降せり、然るに上エルベのスクラブ、ンルナ、ツリンゲンに入寇せしかば、サクセン兵を徵せしに、井チキンド衆を集めて復讐き、宣教師を殺し、フランク兵を破り、秋王親征して四千余人をアルレル河畔のエルドンに斬る、サクセン人憤怒力を協せて蜂起せしも、大にハーゼに破れ、七百八十五年井チキンド歸順して、其衆殆んど下りしも、此後尙徴兵及び十分一税の負擔は數叛亂の基と爲り、八百四年に至り遂に全くフランク帝國に歸服せり。

七百八十一年カール王は復伊太利に入り、次子ピピンを伊太利王と爲し、三子ルド非ヒはアキタニア王たりしが、後從弟ベアリア公タシロの義弟ベチエントム公アリキスと連合し、七百八十七年伊太利を征してアリキスを下し、翌年ベアリアを服してタシロを廢し、七百九十一年其東に當り後のウンガルン地方に居

フランク王國
の隆昌

り、レアブルを伐ちて、數年を経て可汗を降し、民を移し壘を築きてマルクと稱し、エプロ、ピレナイ山河の間には西班牙のサラセンを、東フリタニアにはケルトを、シユレスキヒには唎馬人を、東方にはスラヴ、アブル人を防ぎ、以て邊塞となせり、是に於てフリスランドより南、ダルマチア、伊太利に至り、エプロ河よりアイデルに抵り、フランク王版圖の大、羅馬帝國後に比なく、日耳曼、羅甸、スラヴ、アブル、希臘、亞刺比亞の諸民皆フランク王を仰ぎアスツリア、ガラチアに起りしゴト王アルフォソは好を通じ、蘇格蘭、愛蘭土の君公は臣と稱し、アングロ、サクソン諸王來聘し、エグベルトも此に身を寄せ、アルヅルフも其援助を假り、西歐全土皆仰ぎて望まざるなく、フランク王國の隆典は漸く西歐中世史期に入れり。

西歐羅巴にフランク王國起りて羅馬教皇と連り帝國を復興せんとするに當り、東歐羅巴に羅馬帝統の後を繼承せるヒザンチウム帝は教皇と離れたり、カール王は大版圖を統一してポニファキウスを用ひ、僧正を任命し、國內に基督教を宣傳し、フランク教會會議をフランクフォルトに開きてコンスタンチンブル會議の令を拒絶し、古ガリア、日耳曼、兩教會を統一して大僧正を置き、東皇帝の威令及び

イサウリア帝
統の末世

難き遠方に在りて毀像廢書令に抗する教皇と連和せんとす、而してヒザンテウムのレオ四世は七百七十六年サラセン兵を破りしも、薄志弱行身亦健ならず、在位僅に四年にして歿し、后イレチは雅典の産、美にして慧巧、幼主コンスタンチヌス六世を擁して親政を聽く、時は恰も縛達哈利發メーヂの世に當り、七百七十九年メーヂは自天神の權化と稱する保羅珊の被布行者モカンナ(ハキム)を誅し、希臘帝國を侵畧して、ドリレウムに至りしも志を得ず、長子ヘチをして留守せしめ、次子ハルンに兵九萬を授けて、西征してスタタリに至る、帝國の攝政女后イレチは之を破りて伊太利皇領の失を償はんと願ひ、兵九萬を集めしも、ハルンに抗する能はず、重償を與へて漸く之を退く、然も后は内大權を擁し民心を收めん爲、七百八十二年ニクア會議を徵集して毀像令を停止し、帝長ずるも政を返へさず、帝憤りて兵を起し、母后を廢して親政を視前帝の毀像令を復す、イレチ乃密に僧侶奄孺の輩と帝を謀り、七百九十七年之を宮中に捕へ、廢して盲と爲し寺院に幽閉す、後盲廢帝コンスタンチヌスは五世帝を終ふるまで生存せしも、イサウリア帝統は此に盡きたり、然るに國民は多くはイレチが崇像正教を復せしを徳として

神聖羅馬帝國

廢立の大罪を問はず、五年を経て宰臣ニケフォルス始て之を廢してレスボス島に放ちしが、東方毀像の令を難じ分裂の實を呈しながら、なほ羅馬皇帝の空名を奉尊せし羅馬教皇はレオ三世立ちて、不徳の女后を推戴するを恥辱と爲し、八百年基督降誕祭式日を以てフランク王カールを招きて羅馬皇帝の玉冠を捧げ、遂に西羅馬帝國の後を復し、東方希臘帝國に對して、神聖羅馬帝國を起せり、カール大帝(シャル、マンニ)是なり、シャル、マンニの名世に喧傳するを以て下暫くこの稱を用ふ、

皇帝と教皇と

シャル、マンニ帝の加冠は後世文明の地たる歐羅巴史の大事象たり、歐南の羅馬帝統絶えて茲に三百廿五年、其地は實に東帝國領に併せられしも、民皆歐南の帝國を懷ふや久し、乃シャル、マンニを皇帝として直ちに西帝國の後となす、シャル、マンニ自亦之に居り、日耳曼諸族の如きも、其フランク王たらんよりは羅馬皇帝たるを以て、更に尊を加ふと爲して之を廢せり、故に後神聖羅馬帝國、神聖羅馬教會の稱起り、基督教民を擧げて悉く皇帝、教皇を推戴すべしと信じ、遂に皇帝は政權を以て教皇、教會を左右せんとし、教皇は教權を以て有名なるトランスラチ

カール大帝
(シャルル・マ
グニユ)の内
治

オイムヘリイ(帝國を移易する權)を唱へて相争ひて下らず、中世紛亂の因由と爲れりと雖とも、當時は唯皇帝の名重くして、民皆之を仰かんことを欲し、カール王の業大にして最帝位に應ぜしより授受されしに過ぎざりき。

シャル、マンニユ既に羅馬皇帝の尊に居る、征伐は宗室將軍に任じ、自力めて諸蠻の荒殘し去りし古帝國の制度を復興せんとす、抑フランク王國は素諸部族の團躰に過ぎずして統一の治制莫く、フランク族も慣習の法に準據して、君王尙且改むる能はざりしが、王權稍重くして令制漸く行はれ、シャル、マンニユに至りて、嘗て教皇ロムバルド王家の用ひし名を假用してカピテラ Capite 布き、兵馬、裁判租賦の制を定めて、諸族の異法殊俗を統一し、世襲の諸公伯法官を廢して、勅任の諸官を配置し、欽察使 *Nisi regis* をして國內の皇領、公伯領の行政司法を監視せしめ、之に兵馬租賦徵集の重權を授け、專恣を防ぐ爲に毎年改任し、中央集權を以て地方の離反を防遏し、また教皇アドリアヌスより得たる宗教法を布きて、教義を普及し、ツールの僧正アルクインを用ひて、宗教學校を起して僧侶を養成し、國民をして羅旬語若くば國語を以て祈禱教義を通せしめ、人民の爲に學舎を建設し、

ハルン聖主の
總達の盛世

年を経て北方蠻野の俗を刷洗し去れり、

フランク帝國はビビン、テストリの一戦に勝ちて以後、東アウストラシアは西テウストリアに克ち、日耳曼族の勢は羅馬ケルト族を制したれば、近世佛蘭西の勢力は尙起らず、帝國の中堅はラインランドに在りて、前朝の舊都巴黎、ソアソンは昌隆ならず、シャル、マンニユは多くニメゲシ、インゲルハイムに居り、晩年は温泉あるを以てア、ヘン(温泉の義)に居り、テオドリク大王のラエーナに建築せしサントギタレ寺式に擬して大寺を起し、諸州の臣民、外國の使臣を引見せり、

是より先、七百八十四年總達の哈利發アルマーチ(メーチ)殂し、長子アルハチ(ヘチ)嗣ぐ、時に波斯の勢力は漸く興隆して可蘭、豫言者、天堂不滅等に就きて疑惑を懐く者多く、アルハチは力を盡くして之を鎮壓せしが、母后と合はずして、在位僅に十五ヶ月にして弒せらる、七百八十五年弟ハルン(ア、ロン)位に即く、年二十四、則有名なるアルラシド(聖主)にして學術を盛にし、華奢を擅にし、在位廿三年間に保羅珊に埃及に數四方を巡行し、九びメカに詣り、八次希臘帝國の境を侵し、恰も第

九世紀の始、東は太唐の徳宗、憲宗と西は復興羅馬帝國のシャル、マンニエと時を同
 うして、東西相並びて亞歐兩大陸を連貫し、希臘帝國の如き、版圖小なるに非ざる
 も到底其比にあらず、始アッベス統の起るや保羅珊のバルメク家大政に參し門閥
 を以て世、宰臣の職に居り賢能を延き學術を進め、カリドの子ヤイヤ、バルメクは
 ハルンの妹を娶りて首相と爲り、内政を總覽し州治を圖り城堡を築き商業を護
 り、其子シャアフルは志利亞、埃及を治め、次で宰相と爲り、一門昌榮を極め、七百九十
 二年亞非利加に起りシアリ黨の亂を平げ、ハルンは詩人學者樂工技人を會し、縛
 達府の奢泰は後人の思ひ及ばざる所にして、遺事永く、亞刺比亞夜話にのこれり、
 而して哈利發の使者ア、ヘンに至りシャル、マンニエに謁し方物を獻ず、中に錦帳、
 香象、漏壺の類あり、漏壺の製鼓を設け周圍に十二孔を穿ち球孔を出て、鼓を擊
 ち時を報ず、而して殊に帝の嘉納せしはエルサレム聖廟の鍵鑰なりしといへば
 當時、基督麻譯末二教徒の深刻なる宗教的敵愾は未起らざりしに似たり、
 かくハルン・アル・ラシドの世は麻譯末教國昌平の治たりしも、惜む可し晩年に
 至りては離亂紛々として起れり、初麻譯末の起るや亞刺比亞貴族の小亞細亞に

ハルン、アル、
ラシドの晩年

奔れるあり、其後苗ニケフォルス、八百二年希臘女后イレネを廢して帝位に即き、豐
 像令を復し、國內不平の黨を鎮壓せしが、西の方新興のフランク帝に詔ひ東の方
 縛達哈利發に書を贈りて前帝所約の歲貢を否む、ハルン・アル・アラシド直ちに兵
 を發してピチニア地方を取り、一たび和を約せしも、ニケフォルスの約を破るや、再び
 兵十二萬五千を發して西征し、ヘラクレア以下諸壘を陥れてキリキア沿海に及
 びキアルス島を取る、ニケフォルス帝乃屈し、前約の歲貢を倍して和を爲せり、此時
 コンスタンチノブルの攻零を受けず、帝國の外寇を免れしは、只哈利發前世の失
 顛に鑑みしのみにあらず、實に保羅珊の亂ありしを以てなり、バルメク一家の波
 斯の出にしてイスラムの教に厚からざるを忌み、其隆昌を嫉む者あり、適外希臘
 帝國の事あるに乗じ、不臣を以て之を哈利發に譖す、ハルン・アル・ラシド乃バルメク
 一家を徵して悉く之を誅し、自縛達を出て、ラッカに遷る、蓋此變波斯亞刺比亞二
 民の忌視に出づ、サラセン帝國は州を分ち州大守を置き、哈利發は唯財務祭祀の
 長たるに過ぎざれば、自地方離畔の傾ありて、八百年既にカイルワ、ツニスに新
 哈利發の起るあり、宰臣バルメク一門滅亡して内政紊れしより、バルメクの故地

保羅珊先づ亂る、ハルンよりて、波斯亞刺比亞の疾視反目を認め、長子アミン季子マムンをして二地方によりて教國を分治せしめ其衝突を避け、一殂せば他をして併せしめんと欲し、八百七年亞刺比亞妃の出アミンを縛達に、仲子カシムをラッカに留め、親波斯妃の出マムンと與に保羅珊を伐ちて之を下せしも、諸州なほ離畔の色あり、ラシド之を患ひ八百九年十月病んでメルヅに殂す、年四十一。

ハルン・アル・ラシド生前の計殂後に齟齬し、アミン繼ぎ立ちてフアドルの策を用ひ、マムンにメルヅに従へる宰相の兵を徴し誓約に背きてマムンの領州を奪ひ、教統を子孫に傳へんと欲し、保羅珊を伐つ、兵しばく、利を失ひクフ、ベッソラ至り援くれども及ばず、志利亞は別に一哈利發を立て、獨立せんとし、八百十二年、波斯の將タヒルの軍縛達を陥れ、アミン難に死し、翌八百十二年マムル立ちて哈利發と爲り、教國一時幸に分裂を免れしも、秦奢の運極りて隆盛の時傾かんとす、而して西の方に此教國と相望めるシャル、マンニ帝國も此時全様の運にあひ、帝の三皇子中、カール、ヒピン各地方の政に參して、帝は密に殂後の分裂を悲しみしが、マムン哈利發即位の年二皇子皆帝に先ちて薨じ、帝も次て殂し、翌八百十四年長

九世紀勢頭の
三強の内情

皇子ルイ皇位を嗣ぎ、ルド井ヒ敬神キリストと稱せられ、器局太父帝に讓るも尙十六年の康安を得たるはマムン哈利發の黄金時代と與に、皆カール大帝(シャル、マンニ)、アル・ラシド哈利發の餘澤遺烈によれり、是より先フンの後はセルボア、ボスニア、ラスキ、クロチア等の諸スラヴ族を従へ、殆どフン族の特色を失ひしも、ダニウ河、ハエムス山の間、にアルガリア國を立て、頻に希臘帝國の北徼に入寇し、ダニウ河、ア、テッサリ、兩エピルスを取り、リクニヅス(アクリダ)に都し、八百十年ストリモンを侵し、翌年希臘軍之を防ぎて大に破れ、ニケフォルス帝以下大官將軍多く死し、皇子スタウラキウス重傷を受けて遁れかへり、後數月にして殂し、妹夫ミケール帝天位に即く、ミケール帝性寛厚にして、議院僧侶の崇尊を受けしも、軍務に通ぜず、アルガリア兵邊を擾るに及び、トラキア滯留の衆反し帝に迫りて位を避けしめ、アルメニアの將軍レオを擁立す、時にマムン哈利發即位の後八百十三年なり、これ實に九世紀の始西亞東西歐三強國の形勢なり。

第十二章 希臘帝室の式微、縛達哈利發朝の衰亡

フランク帝國の分裂、希臘帝レオ五世、ミケール吃帝の世、總達宰相フアドールの變、非可蘭の説、縛達の文化、麻罽末教國分裂の端、「八」哈利發對「數奇」帝、テオドラ后、土耳其人哈利發を擁立す、麻哈麻教國の分裂、羅馬人のコンスタンチノブルの脅迫、希臘皇帝、羅馬教皇の反目分離、マシリウス一世の業、マシリカ法典、レオ六世帝、哈利發朝の終末、麻罽末大教國の覆滅、

八百十三年アルメニアのレオ五世希臘帝と爲り、マムン(アルマモン)波斯より出て、縛達哈利發となり、翌年南ガリアの主ルド非ヒは神聖羅馬皇帝の位に即けり、神聖羅馬皇帝の授受は神權に出づと稱するも一ツカール大帝の手に落ちては世襲となり、教皇は太子に抹油し帝に加冠する空式に與るのみ、然るにルド非ヒは大帝の器莫く、八百十六年長子ロタールに帝權を假して政を視せしめ、二子ピ、ン、ルド非ヒにアキタニア、パツリア、姪ベルナルドに伊太利を領せしめ、外國威を保維せるも内實力空く、ベルナルド先づ叛きて死し諸蠻邊徼を擾り、三皇子並び起ちて地を争ひ、八百卅八年ピ、ンは帝に先ちて薨じ、後二年ルド非ヒ帝イングルハイム附近に殞落せしも、後妃の出、少子シャル、はシニアピア、チウストリア、

フランク帝國の分裂

アキタニアを得て、パツリア公ルド非ヒと連和し長兄ロタール帝と位を争ひ、八百四十一年之をフォンタテツム(ヨヌヌ川畔のオーゼル)に破り、翌年シャル、ルド非ヒの間にストラスブルク條約を結び、シャル、の約書は羅馬語を、ルド非ヒはリンガ・テウチスカを用ひて、兩國の用語を分つ、是佛蘭西、獨逸二語別用の古き者にして、ともに羅匈語より出でても、二國分立の兆は歴々として此に見る可し、果して八百四十三年史上有名なるエルドン條約の成立ありて、ルド非ヒは東方日耳曼フランチク(ライン、エルベ兩河間)を、シャル、は西方羅匈フランチクを得て、甲はチュトン王國(レクヌム・チウトニカ)乙はフランキア王國と爲り、ロタール皇帝は二國の間に介在して北海より南伊太利に至る、中部フランチク(シエルト、マース、ソーヌ河、西、ライン、アルプス山東の地)及び伊太利を得て皇帝の後をつぎて、其國をロタリンギアと號し、カール大帝のフランチク帝國は斯に三分せり、而して帝室の嫡流たるロタリンギアは外形勢の據つて堅固たるなく、内民種の雜糅にして統一莫く、二弟の地は東日耳曼族、西羅馬クルト種を領知して互に分離し發達して、相對して民種的國家を化成し、世を経るに従ひ東西よりロタリンギアを侵畧して、中世以降

獨逸佛蘭西隆興の基を開く、故に史家或は評して中世歐洲大陸の史は實に悉く
ゴルドン條約の註脚に過ぎずと爲す者あり、蓋此約後百四十餘年を経てカール
大帝の統斷絶するに至るも、事は直ちに後の歐羅巴列強の興起にかゝるを以て、
筆を此に擱き、東歐西亞の衰頹を叙して已まむ。

希臘帝レオ五
世毀像の變

西はカロリング朝の三分せる間に東は毀像崇像の亂復起れり、九世紀の始希
臘帝國には基督教の像畫崇拜は極點に達し、聖像能く寶貨の所在を示し、崇像能
く富を與ふと説き民は利運を僥倖して節約を勤めず、皇帝レオ五世は身を卒伍
に起して毀像派に左祖し、八百十五年宗教會議をコンスタンチノブルに開きて、
偶像崇拜の弊を論じたるも、自實は兩端を持して決せず、僧侶は其禁令を憤り將
士は嚴制なきを刺り、皆紛々として私訟したるも、遂に一人の刑辟に觸るゝなく、
帝權太輕し、若し宗教の争を外にしては、帝はブルガリア人を攘ひ、軍紀を振肅し
城壁を築き邊防を嚴にして良治の主たりしに、腹心の臣僚ミケール竊に不規を
謀り、事發れて捕へらる、よりに黨人帝を基督降誕祭式の儀場に刺し、ミケールを

ミケール吃帝
の世サラセン
の侵略

擁立す、實に八百二十年なり、

ミケール帝はもとフリギアのアモリウムの農、口訥にして吃帝と稱せらる、亦
卒伍より出で連に武勳を立てレオを擁立せしが、此に於て位を篡ひ、コンスタン
チヌス皇帝の皇女エウロシネを冊して妃と爲し、毀像崇像の自由を許るし、先帝
の流謫せし崇像派の諸僧を召還す、將軍トーマス反し、サラセン兵八萬を得てコ
ンスタンチノブルを圍む、偶ブルガリア兵入寇して野を掠め、トーマス之を撃ち
て大に敗れ、且帝の逆襲を受けアドリアノブルに退きて誅せられ、サラセン兵乖
き去る、而して此間に乘じ八百廿三年西班牙のサラセン兵はクレタ島を取りて
殖民市カンダクを窺め、後世の島名カンチアの起原と爲り、次でシチリア島にて
エウフェミウスの亂あるを機とし、亞非利加のサラセン兵は、八百廿八年始て島に
入り、パレルモを取りて根據と爲し、年と與に島中を蠶養し、八百七十八年シラク
スを陥れ、基督教を排し、希臘語を廢し、皇師救ふ能はず、サラセン遂に地中海を
横行して伊太利を侵畧するに至れり、八百廿九年十月ミケール帝殂し、エウロシ
子子なくして前妃の出テオフィルス嗣ぎ立ち、事を縛達哈利發と構へき、

縛達相フアド
の變

九世紀の始マムン(アルマモン)の世は前哈利發の餘烈を受けし盛代なりしも、其始に當りて、アリ黨の禍あり、哈利發願命擁立の宰相フアドールは素マキ教徒にて、後麻訶未教に歸し、ハルン・アル・ラシドの親任を得てマムンの師たりしかば、此に至りて大政を左右し、波斯人の權勢を張り、弟ハッサンを波斯エメン太守に、他弟をイラク太守に、嚮に縛達を陥れし波斯の將タヒルを志利亞太守に任じて、ダマスコスに鎮せしむ、間もなくアリ黨蜂起して盜賊自盡に縛達府中を横行し、婦幼を脅奪し、民家を侵害し、アリ黨はイラク、エメルに跳梁し、哈利發鎮撫する能はず、よりて八百十七年學行共に秀てレアリの冑苗アリ・ベン・ムサ・リダをメルザに徵して公主に尙して後嗣となし、令を國中に布きてアッバス家の黒衣に代ふるにアリ家の綠衣を以てす、時にアッバス族亞刺比亞に在る者三萬三千、縛達最多く、之を聞きて憤怨し、默然嚙集し、週日の後遙にマムンを廢し、前主メロチの子イブラヒムを擁立す、皆宰相フアドールの謀に出づ、哈利發マムン情を知り、直ちにメルザを發して縛達に向ひ途上フアドールを誅し、其弟ハッサンを監禁し、毒を賜ひてムサを

非可蘭の說

殺し、アッバス家の黒章を復し、縛達の大人を欺きてイブラヒムを覆へさしめ、八百十八年變初て平ぎ、哈利發親政の世と爲れり、マムン親朝に臨むに及び、教國の大變は起れり、始マムンはハッサンの女フランを納るゝの約ありしを以て、亂平ぎてハッサンを釋るし、盛典をワシトに舉げてフランを冊立す、是によりて波斯の貴族州縣の守と爲る者多く、ひきて國教信否の論議と爲り、八百廿六年には、モアビアの紀念を公否し、翌年アリの遺蹟を沒し、聖典可蘭は無始無終永劫の經典たらざるの說生ず、或は曰く、不可里の士、不易の真理と稱する一經卷を上りしより、マムン默契の神示は宇宙を解説するに足らず、宗教の根底は眞如の理法に在る可じとなし、學者を延きて之を談論し、國中有力の判官を都城に徵して、可蘭の說を審議對策せしめ、其議合はざる者は獄に下し送られたり、

縛達の文化

抑當時縛達の文化は空前絶後の盛を極め、後のメチチ時代の伊太利、路易十四世治下の佛蘭西に比す可しと評せらる、始マンヌル、ハルン相次で學藝を保護せ

しも尙未盛ならず、マムンの世に及びて、學者は世界の光輝、人道の教師なりと稱し、賢を延き能を招き、基督教徒といへども厭はず、學校を開き圖書館を起し、梵語、希臘語の典籍を譯し、天文臺を築きて天象を研め、希臘天文學者の誤謬を訂し、パルミラ、ラッカ間の砂地に經度を測り、文法を正し、地理歴史の學を進め、哲學を研究して、アリストテレスの學說を用ひて麻訶末教理を解し、哲學者にアブ・ユヌス・フ・ベ・ン・イサクあり、又アルメニアの哲學者アル・キンヂーは、アルキンヂー辯論を著はして基督教を揚げ、麻訶末教を貶せしも、尙罰を蒙らず、諸種百家の學蔚然として起る、中に就きて醫藥化學は亞刺比亞人の特長にして、下りてボハラのアギケ・ンチは大醫の名を天下に鳴らし、西班牙藥學校の聲譽は世間に喧傳し、南伊太利サレルノ藥學校も亞刺比亞人の學統をつぎ、蒸餾分析、亞爾加里酸類の區別、鐵屬性藥物の製法等皆亞刺比亞人の發明によれり、假令其源を印度に採り、其末は不可思議なる中世天文学の迷信、鍊金術の類となりしも、豈新教弘通帝國建設の外、別に亞刺比亞人學術發明の世界に貢獻するところ多きを稱せざる可けんや、是實にハルン、マムン兩哈利發蓄積富豊學藝獎勵の功績によれり、時にコンスタン

チノブルにテッサロニカのレオといふ哲學者あり、博識宏才なるも世に識られず、マムン傳へ聞きて之を縛達に招かんとす、レオ哈利發の書ヲテオフィルス帝に上つる、帝乃レオを抑留して遣らず、爲に用途を給し學校を興す、マムン憤り、八百三十年戰を希臘に宣し、親軍を將てモスル、アンテオクよりタルス、に至り、一ひかへりしも和議破れて、哈利發の師復出で、ヘラクレーアに至り、八百三十二年、哈利發と皇帝とキリキアに戦ひ、翌年哈利發波斯東の毒に中りて暴に殞し、遺命して弟モタシムを立てしむ。

マムン殞後軍中皆其子アブ・バスを立てんと欲せしも、アブ・バス内亂を恐れ、遺命に由りて位を叔父モタシムに與ふ、モタシム亦亡兄の遺業を紹ぎ、自麻訶末教主として疑議を經典可蘭に挿み、土耳其兵を以て近衛に補し、日に益亞刺比亞人と疎隔し、縛達府民を厭忌し、西北二十餘里の地にサマッラ府を創めて移り居る、始マムン哈利發の初世タヒル保羅珊に新教義を立て、マムンの末年エドリン朝亞刺比亞に起り、東のアクラバ、西のオミア派と皆分離獨立の端を啓き、敎國崩裂の緒を解きしが、此際にまた保羅珊にベク物欲の一派起り、荒淫放酒剽奪を擅にし、其

麻訶末敎國分
裂の端

「八」哈利發と「數奇」帝と

衆都城に迫らんとす、土耳其種の將軍之を北波斯のアゼルバイジャンに撃破し、八百三十七年ベク誅に服す、希臘帝テオフィルス、此亂に乗じてカッパドキアに出で、間牒を縱ち賄賂を行ひ詐畧を用ひ、八百三十六年兵十萬を以てメソポタミアに至りて哈利發の生地ザベトラを屠りてかへる、哈利發憤怒し内亂平ぐや、土耳其阿刺比亞の衆を盡くして、十餘萬を得、號して廿三萬といひ、進みて帝の出身の地アモツウムを圍み、八百三十八年之を陥れ、民三萬を屠り、城中殆んど遺類なし、帝震怖し、遙に救を神聖羅馬の敬神帝に乞ふ、使節東西に來往せる間に、八百四十年ルド井ヒ敬神帝先づ歿し、翌年哈利發モタシム亦滅し、テオフィルス帝も失頓を愁ひて更に翌八百四十二年に病んで歿せり、モタシムは位に在ること八年八月、八子、八女、八子ナル(金の名)あり、故に「八」哈利發の稱あり、テオフィルスは明察下に臨み、像畫を嚴禁し犯者を峻刑に問ひしかば、民其公正を知るも其政に服せず、晩年の失敗を以て神罰に歸する者ありて、世に「數奇」帝と稱す、

基督教の恩主コンスタンチヌス大帝の後をうけし希臘諸帝と麻訶末教國の哈利發と相争ふや、既に久しく、彼に政治上波斯亞刺比亞の反目、土耳其種の興起

テオドラ后

土耳其人哈利發を廢立す

教法上可闕經の異疑あれば、此に神聖羅馬の興起分裂、教皇の離絶、毀像崇像の論議あり、數奇のテオフィルス帝の後テオドラは崇像派なり、太子ミカエル(三世帝)となるや、后は叔父マヌエル、兄バルダス、政家テオクリッスと諮りて政を攝し、放流の僧を召還し、宗教會議を開き、毀像派を迫害し、像畫を復置し、遙に五世前のイレキ后に繼ぎて、所謂基督正教を興す、七世紀の中葉智慧派より出て、麻尼派の教、アラトンの説を雜え、聖パウロの教旨に本くといひて、エウフラテス河西に起りしパウロ派は最テオドラ后の爲に虐遇せられ、刑餘の徒多くミリテナに奔り、哈利發の衆を導きて帝國に入寇す、縛達にはモタシムの長子ワテーク可闕疑議を挿んで、哈利發の説を奉せざる者は敵の囚と爲るも代へず、爲に兵力振はず、八百四十七年鬱憤して歿す、マムン以后土耳其人は漸次任用せられ、モタシムの時哈利發の近衛と爲る者四千人、此に於てモタシムの弟モタワツケルを擁立す、モタワツケル土耳其兵の權を削減せん爲、非可闕派を斥け、アリ黨を排し、猶太基督教徒を抑えて麻訶末正教を復す、猶希臘帝國に基督正教を復せしが如し、八百五十二年アルメニア亂れ、希臘兵埃及を征し、小亞細亞を擾りしも、モタワツケル省みず、サマツラに

大宮殿を造り、驕華を極めしが、八百六十一年十二月近衛の將ワシフに弑せらる。蓋土耳其兵の謀に出でしにて、子モンダセルも僅に數月にして亦毒弑せられ、弟モスタイン、哈利發と爲り、外には八百六十三年ミリテサの奉行オマルは希臘の皇叔ベトロチスと戦ふて敗死し、内には土耳其兵サラセン人とサマラに闘ひ、八百六十四年アリ黨クフアを篡ひて新哈利發を立て、保羅珊の西にはタパリス人反し、ホムスの民は太守を殺し、土耳其兵は縛達宮中に戦ひ、モスタイン亦禍に死し、従弟モタズ、哈利發と爲りしも、敵兵五萬都城を圍み、バツラに出奔して途上ワシフに殺さる。八百六十九年ワテークの子モダチ、土耳其兵に擁立せられ、博奕飲酒を禁じ、伶人舞姬戲奴を放ち、身を以て範となり、教祖示教の簡政を復し、泰平の治期す可かりしに、土耳其人は麻罽末時代の風尙を知らずして、之を否みて叛き、サマラを圍み、哈利發モダチを弑す、實に八百七十年六月二十一日なり、モダチの弟モタメド代り立ちしも、飲宴に耽り文學を愛し、また政權を欲せず、幸に土耳其兵の害を免るゝのみ。

土耳其兵の權重くして、擅に、アッベス統の哈利發を廢立し、教主後嗣の威令邊に

麻罽末教國の
分裂

及ばず、英資ある者割據して新派を唱へ、新朝を起す、西班牙の哈利發朝を外にして、既にアグラブ、エドリシ兩朝あり、マムンの世盛名を搏せしタヘルの子孫陽に哈利發に推服するも、保羅珊に據りて自立の實を有し、モタワツケルの時、鑄工ヤクブ、八百四十九年タヘル家の領地を割奪してソツファル(鑄鑊者の義朝)を起し、哈利發の難起り世亂るゝに乗じ、八百六十七年更に地を拓き、八百七十三年に至りて全く保羅珊を奪ひてタヘル家に代る、タヘル家は四世五十餘年にして滅ぶ、哈利發モタメド省みず、ヤクブ進んで縛達に迫るに及び、邀撃して之をワシフ附近に破る、ヤクブ次で没し、子アムルはアリの後と稱して自哈利發と稱する麻罽末を捕へてモタメドに致して和を講じ、その許を得てセイスタン、ファリスタン諸州の主と爲る、始マムンの盛時ツルンといふ者用ひられ、爾後數主に歴仕したるが八百七十三年其子アームド、埃及太守と爲り、諸雄自立して哈利發制する能はざるを見て反し、志利亞に寇し、ダマスクス、ホムス、アレppo、キンテスリン、アンチオクを奪ひてタルス、に達す、哈利發の弟モツフク之と抗争せしも、八百八十三年に薨去し、アグラブの子イナラヒムの後、カイルトンよりワテーク、モタメド兩哈利發

の世伊太利に入寇し(八百四十二年)羅馬を襲ひ(八百四十六年)後半島の地を失ひしも遂に八百七十八年シラクスを陥れたり、斯く離反相踵ぐ間に、八百九十二年哈利發モタメド殞し、亡弟モワフエクの遺子モタアド位を承け、埃及ツルン朝の入貢を受けて其獨立を認む、ハムダン(カルマト)はバベクの率ひレイスマルの衆を併せてクファに起り、默示を排斥し祈禱祭祀を爲さず、毫も敵を假借せず、志利亞、亞刺比亞、埃及を侵奪す、八百九十五年哈利發モタアドは之を挫き且ツルン朝がさきにタヘル統の保羅珊を奪ひしを思ひ、不花刺のイスマエル・サマナと連和して之に當る、サマナは八百七十四年以來トラスノスオキサニアに自立して、素よりツルン朝の強盛を忌む、哈利發の連和を得て大に悦びて兵を集む、ツルン朝の二世アムル先づ發し、八百九十八年之を撃ちて敗れ、之より後連戰連敗し、九百一年孫タヘル・ベノム・ハメッド空位を承けしもツルン朝は遂に滅ぶ、而して哈利發モタアド亦年を同うして殞し、子モクダフイウギしも、サマナ既にオキサス河外の地を掩有し、東は支那の境より西は保羅珊を呑みて波斯に及び、新にサマナ朝を起し、カルマトは益鬪器を逞くし、メッカの隊商を

香がし巡拜の徒二萬を屠る、亞刺比亞國中爲に奮起して之を亡ぼし、モクダフイ、哈利發は九百七年ツルン朝を滅ぼして埃及を復し、翌年子モクダアル、哈利發となる、年甫めて十三、教國空前の幼主なり、是を以てモタズの遺子アナダラ之を幽閉せんと謀り、却つて侍衛の誅する所となる、然も幼主は女孺庵寺に左右せられ用途多く、宮掖治まらず、地方の分裂益急に、九百九年アリの後と稱する者、亞非利加によりてファキマ朝を立つ、始教祖麻譚未は後世マーチといふ者必ず興らんといひしも、七世紀の末に一人ありしのみにて、波斯、亞非利加、土耳其、埃及皆此豫言を信ぜしかば、オベイダラといふ者、自マーチと號し、アクラフ家以下諸豪を滅ぼし、東埃及の境より西大洋に至るまでの地を統一し、カイワル附近に都城マアヂを造り、連りに伊太利シチリアを抄畧す、此の如くサラセンの大領土も土崩瓦解して復收め難く、衰勢滔々年とともに急なり、此頃希臘帝國も亦振はず、之より先五十年アルガリア人の寇畧を蒙り、之に基督教を奉せしめて、パエムス山地方を割讓す、アルガリア人乃東方帝國の文物を輸入し、其貴族はコンスタンチノブルの宮庭學校に出入し、年と與に風を移し俗

羅斯のコンスタンチノブルの脅迫

を易へしが更に恐る可き民族は北方より起れり、匈牙利と羅斯とは是なり、中に就きて羅斯人は素スカンヂナヴィアの族にして寇賊を業としプラランギと稱せらる、(其起原の詳は次編を見よ)年と與に南移してノヴゴロド附近より小流に輕艇を浮べてキエフに出て、互市し、ボリスチヌ河を下りて黒海に出て、アナトリアに抵り、年毎にコンスタンチノブルに來往し、毛皮獸革を積みて穀酒油香に易へて北に歸り、よく南方の豊富を知る、八百六十二年スカンヂナヴィア種の酋長ルリク始て羅斯の君公となるといへども、尙諸酋部族を率ゐて統一せず、八百六十五年キエフの諸公輕艇二百艘を以て初めてコンスタンチノブルを脅かす、適ミカエル三世帝サラセンと戦ふて在らず、此を聞きて急に歸り、撃ちて之を退く、帝の世都城の法教師長イグナチウスを廢し、代ふるに大官フチウスを以てす、俗人の教界の長となる前例ありといへども、イグナチウスの黨之を拒みて羅馬教皇ニコラウス一世に訟ふ、教皇は始帝に黨せしも、後イグナチウスを助け、八百六十二年羅馬宗教會議を開きてミケエル帝を破門せんと威喝す、フチウス報を得て亦會議を開きて教皇を破門し、ナルガリア、スラヴの衆を教化して、西の方教皇が神

希臘皇帝と羅馬教皇との反目

パシル一世の業

聖羅馬帝國の日耳曼族を依頼せると相對抗す、時に八百六十六年なり、蓋し羅馬教會は神靈は神子、神父並ひ顯るとなせども、希臘教會は神子によりて神父より出づとなし、西方には僧侶の結婚を禁ぜるも、東方には僧正以下は之を許す等の差異ありしかば、此る乖離を見るに至り、後二百年を経て東西全然分離し去れり、然るに此時母后テオドラは宗教の儀に參畫し、帝を兄ベルダスに托して顧みず、爲に少年にして英悟なりしミカエル三世も外戚叔父の惡風に染み、事を以てベルダスを誅して後は肆情縱欲自用ひ、酒帝の名を得て政に倦み、小厮パシルを寵任登用して宰臣と爲して大政に參せしむ、パシルよりて禍心を包蔵して帝に阿附し、八百六十七年遂に帝を弑して位に即けり、

パシル一世は賤族より起り恩主を弑して帝位を簞ひしも、施政宜を得て、當時の一明主たり、帝はマケドニアの産なれば初より崇像派にして正教を奉じ、八百六十九年フチウスを廢し、翌年宗教會議を開きイグナチウスの職を復し、羅馬教會の勢東に起らんとせしも、八百七十八年イグナチウス薨じ、フチウス再び教界を總管し、政教並施して遂に後世より宗教改革の先覺として仰がる、時に伊太利

にはロムバルドの二公子ベネゴンツム公領を争ひ援をシチリア島中のサラセ
ン族に乞ひ、サラセンは之に縁りて進畧の地を作さんと欲し、半島に入りてペリ
市に據り、戦亂年を経たり、恰もバシル帝即位の年、神聖羅馬帝ルドヴィヒ二世ペリ
を圍み、バシル帝水師を出して應援す、八百七十一年に至り、市城陥りしも、東西の
兩皇師功を争ふて和せず、サラセン間に乘じて羅馬府を襲ひ、歳銀二萬五千馬を
教皇ヨヰニ八世より得て、兩皇帝の師、ロムバルドの衆も皆サラセンの賊と與に
南伊太利を奪略し、ナポリ、アマルフィ、サレルの諸公すら麻譚末教徒と通同して、羅
馬の近郊を剽掠し、皆自利を營みて、從義を省みず、唯終始サラセン族と拮抗する
は半島中教皇あるのみ、バシリウス乃大兵を増進して、サラセンを半島より攘ひ、
南伊太利に皇領を置く、然れども帝の功業は實に正教の復舊に非ず、サラセンの
擊退に非ず、言語習俗の變遷によりて、ユスチアヌス皇帝欽定の大法典を四十一
編に改輯し、バシリカ法典のながく後世を益せしに在りとす、

八百八十六年バシリウス帝歿し、伯子コンスタンチヌスは夭し、季子ステファノ
は教門に遁れ、仲子レオ帝位に即き、叔子阿歴山と政を分掌す、レオ六世是なり、或

バシリカ法典

レオ六世帝

はいふ、レオは先帝の繼妃エウドキアの出にして、實にミカエル三世の皇胤なり
と、レオ帝の世東の方數兵をサラセン人に交へ、互に勝敗ありしが、九百四年七月
テッサロニカを圍まれ、嘗てコンスタンチノアルの危急を救ひし砲火は今却つて
敵の用となりて、市城陥り、南の方皇師速りに伊太利に破れ、北はアルガリアの英
主メオン通商の紛議より干戈を執つて來り、迫り、帝國の外戦は失多く、九百十六
年帝歿し、皇弟阿歴山、姪コンスタンチヌス七世帝、雲班石宮に生れて、ボルフィロゲ
ニツスの號あり、の政を攝せしも、僅に一年にして薨じ、帝幼くして、シメオンは北
より、土耳其人は東より來り、侵し、將軍ロマヌスシカヘヌス威福を弄び、九百十九
年女エレナを納れて、帝后と爲し、三子と與に大權を竊み、帝空位を擁すると、廿五
年、敢て争ふ能はず、後后エレナ父兄を斥けて、帝の政を復したり、

時に麻譚末教國は哈利發モクタデル一び廢せられ、再び位を復せしも、モスル
叛きて討つ能はず、カルマト派はメッカを陥れて、巡拜の徒を屠り、方殿を毀ち、黒石
を移し、セムセムの靈泉を汚し、マキ教徒波斯に蜂起して、タバリスタンに亂入し、
反徒縛達宮中に起りて、モクタデルを弑し、弟カヘルを立つ、カヘル母を弑し、宗室

末 哈利發朝の終

麻訶末大教國
の覆滅

大臣を誅戮し殘暴已まざりて十八ヶ月にして亦廢死す時に九百三十四年なり此際ギランの主カアスはデレムに據り其子アヤ九百三十三年自立してアヤ家を興し哈利發カールの姪ヲ推立せらるゝや大公を置きて自政法の實務を辭して之に一任し爾後哈利發宰相空名を存して毫末の重なく九百四十年ヲチの歿後は古傳遺風地を拂ひ祭祀なく詩文なく正教なく苟くも國家元首の權は悉く大公に歸し尙三百年間哈利發は血統を持続するのみにて史上に亡びたり抑麻訶末の起るや教を以て國を立て聖典を敘述して政教の大本となし利劍を揮つて征服の偉業を始めしに四方忽風靡し其教四方に弘通し其徒天下に瀾滿せしと雖も年を數ふれば其間僅に百年に過ぎず奈何ぞ亞刺比亞土耳其異俗の民深く基督教に浸染せる志利亞富強を恃める波斯アルメニアメソポタミア埃及西班牙大唐の西域印度の外徼に在る異殊の蒼生を驅りて能く混然たる一教國民となすを得んや是に於て乎マムンモタシム以後夙に離畔の兆生じ抗爭分裂は世の下ると共に益速に愈激しく板蕩二百餘年を経て一時版籍の大天下に冠絶せし大教國は遂に幾多の僭主篡賊の爲に分割され了れり興亡の變豈亦

速ならずや後四十年を経て神聖羅馬帝位をうけしメロギンク統は盡き百餘年にして希臘帝國のペシル帝統絶ゆ彼は歐洲新興國史の前となり此は土耳其の興起とともに東歐勢力の轉局を出す故に今麻訶末教國の分裂を以て西史の一段を結び東隋唐の東方統一に移る可し

世界史上巻終

世界史上巻索引

ア

ア、ヘン……………九七九
 ア、メス(アマシス)「一世」……………二〇
 ア、メス(アマシス)……………一〇五
 アウグスツス……………
 ……(オクタヴィウス)六一三、六一六、三頭政治、六一七、
 ムベイウスに克つ、六二二、アントニウスと争ふ、六二三、之に克
 つ、六二四、大元帥となる、六二七、アウグスツスと稱す、六
 二八、一家の不幸、六三二、六三六、六三八、殞落、六四〇
 アウレリアヌス……………七九八、七九九
 アエギナ……………一四七、一五〇
 アエシヤ……………九二三、九三六、九三七
 アエスキロス……………二五三
 アカマニシユ……………九七

アガトクレス……………二八八、二八九
 アクエ・セキステエ——の戦……………五五三
 アクチウム——の戦……………六二四
 アグリコラ(クチイウス・ユリウス)……………六六九、六七〇
 アグリッパ……………六二三、六二四、六二八、六三一、六三二
 アケア——同盟……………五三四
 アゲシラウス……………一八六、一九二
 アシナイ……………六五三
 阿蘭世……………三〇七
 アシユラキッドン……………六三六、六六六
 アシユラキッドン「二世」……………四八
 亞述——の發祥、二九、——ケータの隆替、三一、外征、四二、四
 三、四四、四七、衰微、四九、前後——の差、五一、後——の
 末世、八一、滅亡、八四、
 アシユルナサルバル……………四二

- アシユルバニバル 六五、七三、七六
- アシユルベリッド 二八、三一
- 阿頼迦 三〇九、三二〇
- アタウルフ 八三七、八三八
- アタナギルド 八四七、八四八、其二公主、八四八、八四九
- アッチラ の南侵、八四三、八四四、東羅馬との和、八四四、西羅馬、四ゴトミ戦ふ、八四六、伊太利侵襲、八四六、殞落、八四七、の子孫、八四八
- 雅典 一三一、の隆興、一三七—一四五、の水師、一五〇、の黨争、一六五、の民政、一六六、の民政貴族政の争、一六六、の黄金時代、一六八、の抜擢、一七〇、—スパルタの交戦、一七二、のシキリア征伐、一七五、の政變、一七八、の三十倍主、一八二、一八三、の衰微、一八四、—マケドニアに抗す、七〇—
- アドリアヌス(プブリウス・エウサス) 六七九—六八一
- アニライ 六五三、六五四
- アスルシルワン「コスロエス一世を見よ」
- アップス—家、..... 九六三
- アポロン—神廟、..... 九九、一二五
- アマゾン—の傳説、..... 七二
- アマラスフィンター 八七三、八七四、八七五
- アマフィクチオニー 一二七
- アムル 六三〇、六三一、六三七、六三八
- アムンメー「三世」 一六
- アフガルス 五九九、六〇〇
- アフダラ 九四二—九四四
- アフデルメリク 九四三—九四五
- アフデルラマン 九六四
- アフベケル 九二〇、九二三、九二四、哈利發—、九二五、殞、九二六
- アフモスレム 九六三、九六五

- アブラハム 一三
- アラツス 五一五
- 亞刺比亞 の地理、

- 九一四、—神異譚、九一五、—の香象時代、九一七、—文學の興起、九四四、其三詩人、九四五、—の學術、九九〇
- アラリク の侵襲、八三四、八三五、—伊太利を蹂躪す、八三六、—羅馬を陥る、八三七、殞落、八三七
- アリ 九二〇、九二四、—繼承の亂、九三六、—哈利發となる、九三七、殞、九三九
- アリアッテース 九一
- アリウス—派、..... 八二〇
- アリストタルス 一四三
- アリストタルクス 二五五
- アリストチデス 一四八、一五〇、一五八
- アリストテレス 二二七、二五一

- アリストファテス 二五三
- アリダエウス 二二五、二三〇
- アルカヂウス 八三三、八三九
- アルキピアデス 一七四—一七八、一八〇—一八三
- アルゴス—艦の遠征、..... 一一一
- アルコン 一三一
- アルサクス「一世」 二四八
- アルサクス「二世」 五一二、五一三
- アルタクシヤトル(—ロンギマヌス) 一六一
- アルタクシヤトル(—ム子モン) 一八四、一九一
- アルタクシヤトル「三世」 一九三
- アルタバヌス 五二二、五一四
- アルタバヌス 六四八、その和、六四九、殞、六五四
- 馬とアルメニアを争ふ、六四八、その和、六四九、殞、六五四

アルタベヌス「四世」……………六八八、六九〇
 アルタフェルチス……………一四〇、一四三
 アルデシル……………七八六、七八七、七八八
 アルパロンガ……………二五八
 アルポイン……………九〇一、九〇二
 アルボガスデス……………八三一、八三二
 アルマンソル……………九六四、九六五
 アルメニア……………の興起、五七七、
 王廢せらる、六二三、バルチア羅馬の争術となる、六四八、六
 四九、六五七、六五八、波斯、羅馬に分たる、八四〇、八四一
 アルヤ——人……………六七
 アレオバクス……………一三四
 阿歴山……………「大王」、即位、二〇四、
 北伐、二〇五、東征二〇七—二一〇、南征、二一〇、印度に入
 る、二一五、三〇八、印度河を下る、二一七、四蹄、二一八、

東征の効果、二二一、——帝國の經營、二二一、殞落、二二三
 阿歴山「マケドニア王」……………二三一、二三四
 阿歴山「羅馬帝」……………七八九、七九〇
 アレキサンドリア……………
 二二一、二二八、——圖書館、二四二、——の學問、二五
 四、——教學の盛、六八〇、——サラセンの手に落つ、九三二
 アレマンニ……………七九六、七九八
 アンタルキダス——條約……………一八八
 アンチオキア(アンチオク)の版圖……………二三九
 アンチオクス「救主」……………二四五、二四七
 アンチオクス「ヒエルクス」……………五一一、五一二
 アンチオクス「大王」……………五一三、五一九、五二〇、五二一
 アンチオクス「國王」……………五七〇
 アンチオクス「廢帝王」……………五七二、五七四、五七九

アンチゴヌス二二六、二二八—二三一、二三五、二三八、二三九
 アンチゴヌス「ユナツス」二四一、二四二、二四四、二四五、
 五一四、
 アンチゴヌス「テオス」……………二四七、二四八
 アンチパテル……………二二三、二二六、二二八
 アントニウス……………「マルクス」——「六〇
 六、六〇七、六一四、カエサル暗殺者と——六一五、六一六、
 三頭政治、六一七、クレオパトラと——六一九、東征、六二
 二、六二三、——オクタウィウスと戦ふ、六二四、自裁、六二四
 アントニウス……………七八八、七八九
 アントニウス(チツス・アウレリウス)……………六八一
 アントニウス(マルクス・アウレリウス)……………
 ………………四六三、六八〇、六八三、六八四

倭——漢通交の始……………四四七
 伊尹……………三三二
 幽王……………三三三
 イオニアの亂……………一四四—一四六
 井クドリヤ……………七九八
 イコノクラスト(毀像派)……………九六七、九八六
 イサウリア……………帝統の起原、九五七、——帝統の末世、九七六
 イシュツエグ……………九二、九五、九九
 イスマゲルド三世……………九二七—九二九、九三五
 イスパニア(西班牙)……………カル
 タゴ時代、四九〇、四九二、羅馬時代、五一八、西ゴト時代、
 八五八、サラセン時代、九五六、——哈利發朝の起原、九六四
 イッス、の戰……………二一〇

イスラニル「猶太を見よ」、
 イソクラテス……………二五三
 イタリア(伊太利)……………
 ……の地理、二五六、民族、二五七、「羅馬を見よ」
 伊穉科……………四〇七、四〇八、四〇九
 井千ギス……………八七七、八七八、八七九
 非テルリウス(アウルス)……………六六三、六六四、六六六
 イナルス……………一六〇
 イフィクラテス……………一八八、一九二
 イプス、—の戦……………二三八
 姚興……………七四一、七四六—七四八
 姚萇……………七三六、七三九、七四〇、七四一
 殷……………三二四—三二五
 インスチチチオチス……………八九五、八九七

印度……………の名稱、二九六、—アルヤ種の起原、二九七、吠

陀時代二九八、—の叙事時代、二九九、—の四色姓、三

〇二、—の哲學時代、三〇四、—の科學哲學諸派、三〇四

ウ

禹……………三一九—三二一
 ウニチフェス……………
 烏桓……………四二二、七〇二、七〇三
 烏孫……………四〇四、四一〇、四二五、四二七
 宇文泰……………七七二
 ウヅシャトラ……………八二八、八四、九一

エ、エ

衛青……………四〇六、四〇七、四〇八
 英布……………三八八、三九〇、三九二、三九七
 エウクリデス……………二五四
 エウメテス……………二二六—二三〇
 エウリピデス……………二五三
 エキントス(出埃及)……………二五
 埃及……………の名稱、
 五、—の有史以前四、—の宗教、五、—諸王朝の配次、六、
 —第一王朝、七、—第三王朝、八、—牧畜王朝、一五、二
 〇、—第十二王朝、一五、—第十八王朝、二〇、—第十九
 王朝、二三、—第二十二王朝、二六、—第廿一王朝、二七、
 —エチオピア朝、五四、七四、「フトレマエウス朝を見よ」、
 エクノムス—の戦……………四八五
 吠陀時代……………二九五
 吠檀多派……………三〇五

エチオピア朝

五四、七四

越……………三五三

エテチア……………八四七

エバミノングダス……………一八九

エフィタルテス(嚙嚙)……………八六一、八六二

エフォルス……………二一九

エムヘドクレス……………一六三

エラム……………—王國

の興起、一二、—王國の滅亡、一四、—の亂、七六—七八

エルサレム……………四四、—の陥落、八六、—の滅亡、六

六七、—復興の企圖、八二—、サラセン—を陥る、九三〇

エルテケ—の役……………六一

エルドン—の條約……………九八七

エルメチキルド……………九四九、九五〇

ネレミア……………八六一—八八
 エロナ……………八六一
 燕「戦國の——」……………三五八、三五九、三八〇
 燕「前——、慕容氏」……………七二四、七三二、七三五、七三六、七三七
 燕「後——、全前」……………七四〇、七四一、七四四、七四五
 燕「西——、全前」……………七四〇、七四一
 燕「南——、全前」……………七四三、七四五
 燕「北——、馮氏」……………七四六、七五二
 閼——氏「後漢の外戚」の變……………四六六
 閼裔珍……………四五—
 袁術……………六九七、六九八、七〇〇、七〇一
 袁紹……………六九七、六九八、七〇一、七〇二、その賄子、七〇三

オ、ナ
 オクス「ダラヤサシニ世を見よ」……………
 オクタ并ウス「アウケスツスを見よ」……………
 オストラキスム……………一三九
 オト「サルギウス——」……………六五九、六六三、六六四
 オドワケル……………八五〇、八五五、八五六
 オトマン……………九二〇、九二四、哈利發——、九三四、殞落、九三六
 オノマルクス……………一九九、二〇〇
 オマル……………九二四、哈利發——
 の東伐、九二八、九二九、——の四征、九三〇、殞落、九三四
 オミア……………——家、九一六、——哈利
 發の起原、九三九、——朝の極盛、九四五、——朝の封城、九
 四六、——朝の衰運、九六一、九六二、——朝の滅亡、九六三
 オリオンツス——同盟……………一九八

ゾロカセス……………六五六、——羅馬とアルメニア
 な争ふ、六五七、——フワギウス朝との隣交、六七四、六七五
 プロガセス「——三世」……………六八〇、六八六
 プロガセス「——四世」……………六八六—六八八
 オロデス……………五九八—六〇二、六二一

カ

夏……………三二一、三三二
 夏「赫連氏」……………七四六、七四八、七四九、七五一
 河「黄河」——決……………三三三、四三二
 蓋天……………三二七
 カウガメラ——の役……………二二一
 高歡……………七七一、七七三

更始「劉玄」……………四三九、四四一、四四二
 頂籍……………三八六—三八九、三九二
 高祖「漢の——」……………三八六—三八八、三九二
 交趾——の亂……………四四六
 孝文帝「拓跋魏の——」……………七六四—七六六
 ガウロス……………三六
 カエサル「ユリウス——」……………五六七、五九一、五九二、西班牙
 にゆく五九三、執政、五九四、五九五、——の北征、五九六、
 六〇二、六〇三、——ホムベイスと争ふ、六〇五—六〇七、
 ——埃及に入る、六〇八、——帝國の首領となる、六一〇、
 の施設、六一一、——の地位、六二二、弑殺、六二三、六一四
 カエサル「カイウス——」……………六三八
 カエロチイア——の役……………二〇二
 賈誼……………四〇〇、四一八
 樂毅……………三六七

カッサンデル……………二二三、二二八、二三一、二三八、二三九
 合従「六國の——」……………三六三
 カツシウス……………六二三、六一六、六一八
 カスカ(セルギウス)……………六一四
 カーチ「ケーヌを見よ」……………
 カツルス……………六三四
 カデシエ—の役……………九二八
 カチリナ……………五九〇—五九二
 カト……………五九二、五九五、六〇八、六〇九
 カト(ポルキウス)……………五二三
 迦膩色迦……………四五一、四五二
 カムピセス「カムプシヤを見よ」……………
 カムプシヤ……………一〇三—一〇七
 ガムムラビ……………一九

カラカセラ……………六八九、六九〇
 ガリア—人の伊太利侵略……………二六九
 ガリエヌス……………七九四—七九七
 カリグラ……………(カ
 イウス・ゲルマニクス・カエサル) —の幼時、六四六、—の即位、六四九、—の暴行、六四九、六五〇、—の殞、六五〇
 カリヌス……………一四一
 カール(—大帝)……………
 ……「シャルマンニュ」—とカルロマン、九七一、ロムゴ
 ルド王国を滅す、九七二、—のサクセン征伐、九七三、九七
 四、羅馬皇帝—、九七七、—の内治、九七八、殞落、九八二
 カルケミシエ—の役……………八五
 カルタゴ……………初置、四九、一五六、—希臘とシキリアを争
 ふ、一五七—羅馬の條約、二七二、二七三、—のシキリア
 經營、二七四、シラクサ軍—を圍む、二八九、—の政教、
 四七九、四八〇、—の貿易商業、四八一、—羅馬の戦「ホ
 エニ役を見よ」、—僱兵の亂、四八九、—の滅亡、五三七

カルツ(カルデア)……………四三、五七、八四
 ガルバ(セルギウス・スルピキウス)……………六六一、六六三
 カレド(「神劍」カレド)……………九二三、九二五、九二六
 ガレリウス……………八〇二、八〇六、八〇八、八〇九、八一—
 漢(前)……………楚の角逐、三八九—三九
 二、—の封建の復讐、三九三、同姓の樹立、三九七、官制の
 改革、四〇二、—の盛世、四〇三、—の十三州、四一六、
 —代の學文、四一六、四一七、—末の亂、四三五、四三六
 漢(後)……………の始世、四四四、
 —の極盛、四五七、—と安息、大秦と、四六二—六八四、
 —代の地震、四六七、—の外戚と宦官、四五九、四六五、四
 七二、四七四、—黨人の横議、四七三、—の滅亡、七〇八
 韓……………三五七、三七六、三八〇
 韓(—族)……………四一四
 甘英……………四六二
 韓信……………三八九、三九一、三九七

雁臣……………七六六
 カンチ—の役……………四九七
 韓非……………三七九
 魏「戰國の——」……………三五七、三七八、三八〇
 魏「曹——」……………の起
 原、七〇八、—の盛時、七一三、—の衰勢七一四、—室の
 廢立、七二五、—蜀を伐つ、七二六、—晋の禪讓、七二七
 魏「北——、則拓跋——」……………
 拓跋氏の先、七二四、—の興起、七三三、七四二、—柔然
 との争抗、七四七、七五三、四城—に通ず、七五五、—の
 内治、七五七、—時道佛の隆替、七五八、—室盛漸の極、
 七六四—七六六、—の豐盛、七六八、—時佛敎の再隆、七
 六八、—の衰亂、七六九、—の分裂、七七二、東四—の

内治、七七一、東——の滅亡、七七四、西——の滅亡、七七五
 丘就卻……………四五一
 葵丘——の會……………三四二
 キグス……………七五、七七——の金貨、九〇
 キケロ五八三、五八六、五九〇、五九一、五九二、五九五、六一七
 睢水——の戦……………三九〇
 キノスケフアラエ——の役……………一九一
 ギミツライ……………七一、七三、七五
 魏無忌……………三七八
 キモン……………一五九、一六二、一六五
 羌(一族)……………四六八—四七一
 姜維：七二一、七二二、七二五、——の北征、七一六、——の卒、七一七
 匈奴……………——の興起三九四、三九五、四〇四、四〇六、
 〇六、——征戦に努る、四一五、衰頹、四一六、——の虚弱、
 四二五、——五單于の亂、四二五、——漢と通婚す、四二九、

南北——の分裂、四四六、——の劉氏、七二三、「趙等を見よ」
 鄴——下の七子……………七八一
 キーリアルク(千人長)……………二三五
 金字塔朝……………九
 キンナ(コルチリウス)……………五六二、五六三
 均輸の法……………四二〇
 キロン……………一三二
 ク、
 クエートル……………二六七
 クーエン・アテル……………二二
 クシャトラバ……………一〇一
 クシャヤールシャ(クセルクセス)……………一五一—一五四、一六一
 クセノクラテス……………二五一

クセノフォン……………二五二
 クヅル・ナクーンタ……………一二
 クテシフォン……………五三三、——の陥落、九二八
 クナクサ——の役……………一八五
 クチウス……………六〇八
 隗囂……………四三九、四四二、四四三
 黄帝……………三一六
 光武帝「後漢の——」四三八、即位、四四一、天下統一、四四二、
 四四三、内治、四四四、外交、四四六、四四七、殂落、四四八
 徯——氏「漢の外戚」の變……………四二三
 霍去病……………四〇八、四〇九
 霍光……………四二一、四二二、四二三
 關羽……………七〇四、七〇八
 桓温……………七三四、——の北征、七三五、七三六、卒、九三九

宦官……………——の起四二九、——
 賈氏を除く、四五九、——郭氏を除く、四六五、——閻氏を屈す、
 四六六、——弄權の根底、四六七、——梁氏を滅す、四七二
 桓玄……………七四四、七四五
 管仲……………三三九—三四二
 宦渡——の戦……………七〇二
 クファ——の初置……………九二九
 クラウヂウス(アヒッス)……………二六六
 クラウヂウス(チペリウス)……………六五一、——閻閻の亂、六六二
 クラウヂウス……………七二七、七二九
 グラックス(チペリウス)……………五四三、五四四、五四五
 グラックス(カイウス)……………五四三—五四九
 クラッス、(リキニウス)……………五六
 四、五六五、五八二、五八三、五九三、東征、五九八—六〇〇
 クラテルス……………二二六

クラチイクス——の役……………二〇八
 基督(耶穌)——降誕、六三九、六四六、教、六四七、磔死、六四七
 基督教……徒の迫害、六六〇、——の初羅馬に行はれざりし所
 以、八〇七、イオクレチアヌスの——禁令、八〇八、——の隆
 興、八一三、正教とアリウス派、八二〇、ユリアヌスの——迫
 害、八二二、テネドシウスの——保護、八三二、西ゴトに於ける
 加特力教、九五〇—九五二、東方の毘像派、九六七、九六九
 クリソストム・ヨハネ……………八三九
 クリメヌス、——の役……………二八八
 クル——一世……………九七
 クル——大王……………九八一—一〇四
 クル「少クル」……………一八〇、其亂、一八四、一八五
 クル(——族)……………三〇〇
 クルレ・エチレス……………二七二
 クレイステチス……………一三九

クレオメチス……………一四〇、一四七
 クレオパトラ……………カエサルと——、六〇
 八、六一三、アントニウスと——、六一九、六二三、殞、六二四
 クレオン……………一七一
 希臘……………の地理、一一七、——の入、一一
 九、——外國の風化、一一九、——の神話、一二〇、——半島
 民族の移遷、一二五、——の哲學、一六三、二四九—二五二、
 八六六、——の史學、二五二、——の戲曲、二五三、——砲火、二五
 九、所謂——帝國、九六七、皇帝と羅馬教皇との反目、九九八
 クロイソス……………九九
 クロネス……………八五七、八五八
 軍臣……………四〇六

ケ、

羿……………三三二
 ケイコスロー「クル大王を見よ」……………四〇二
 景帝「漢の——」……………三九〇
 祭陽——の戰……………三九〇
 ケータ……………(カーチ)種族、一二、埃及の十九朝との關係、二
 三、——亞述の隆替、三一、小亞細亞に於ける——の遺蹟、七二
 築……………三三二
 月氏……………三九五、四〇四、大月氏、四〇七、四〇八、五七五
 グビド……………七九三、八五三、九〇一
 堯……………三一八
 挾書の禁……………三八四、四〇〇
 ゲルシア……………一二九
 ゲルマニクス……………六三
 八、——の北征、六四一、——の東征、六四三、病没、六四四
 猥狁……………三三一、「匈奴を見よ」

ケンゼリク……………八四
 二、南渡、カルタゴを陥る、八四三、北渡、羅馬を陥る、八四九
 ケンソル……………二六七
 元帝「東晋の——」……………七二九、七三〇
 献文帝「招跋魏の——」……………七六三、七六四

コ、

呉「春秋の——」……………三四九、三五三、三五四
 呉……………「三國の——」起原、七〇六、——蜀と連る、七一〇、
 ——の頽勢、七二四、——の廢立、七二五、——の滅亡、七一八
 伍員……………三四九
 寇謙之……………七五八
 孔子……………三三七、三四八、三五二、三五三、三七三

勾踐……………三三三、三五四
 泓水——の戦……………三四三
 公孫瓚……………六九七、六九八、七〇〇、七〇一
 公孫述……………四三九、四四三
 鴻門——の會……………三八八
 呼韓邪……………四二六、四二七
 五胡十六國……………七二三—七五二
 コスロエス……………六七六—六七八
 コスロエス(アメルシルツン)……………
 ……内治、八八四、外征、八八五、八八六、租落、八八七
 コスロエス(マルエエズ)……………即位、九〇六、西征南伐、九〇
 八、羅馬と戦ふ、九一一、——の末路、九一二、租路、九一三
 ゴタルゼス……………六五五、六五六
 五帝……………三一六—三二〇
 ゴト……………——の南移、七九二、羅馬帝國

に迫る、七九三、井シゴト、オストロゴト、七九三、復帝國に
 迫る、七九五、三び帝國に迫る、七九七、東ゴトとフン、八二
 八、東ゴトの三兄弟、八四七、八五三、東ゴトの伊太利征服、八
 五五、其婚姻同盟策、八五七、その滅亡、八八三、四ゴト羅馬
 帝國に入る、八二八、八二九、その侵襲、八三四—八三七、そ
 のトリサ王朝の起、八三八、その滅亡、八五八、四ゴト王家の
 革命、八七三、四ゴトの改宗、九五〇、その十一主七十年、九
 五一、九五二、その式微、九五三、九五四、その滅亡、九五五
 コバード……………廢位、八六
 三、位、八六四、——教皇を推く、八六四、八六六、租、八七〇
 コミチア・クリアタ……………二五九
 コミチア・ケンツリアタ……………二六〇
 コミチア・トリアタ……………二六二
 コムモツズ……………六八五
 コリント——役……………一八七

ゴルヂアキス……………七九一、七九二
 コルデキス……………八九五
 鯨……………三二八、三一九
 コンスタンチウス……………八一八、八一九、八二〇
 コンスタンチヌス……………出身、八〇九、統一、八一
 ○、新制度、八一五、八一六、租、八一七、——の三子、八一八
 コンスタンチノポリス……………設置、八一四、サラセンの第一
 攻圍、九四〇、その第二攻圍、九五八、羅斯人の來攻、九九八
 コンスル……………二六二
 昆陽——の戦……………四三九

蔡倫……………四六五
 曹操……………六九
 七、六九八、——帝室を擁す、六九九、七〇〇、——袁氏を滅
 す、七〇一、七〇二、南伐、七〇四、七〇五、魏公となる七〇六
 莊周……………三七五
 曹大家……………四六〇
 薩贊朝……………開基、七八六、
 ——羅馬とアルメニアを分つ、八四〇、八四一、嚙噬の禍、八六
 一、八六二、——王室の難、八六二、八六三、——マツダーク
 新教の變、八六三—八六六、——の黄金時代、八八五、——の
 極盛、九〇九、——の滅亡、九三五、——王族唐に降る、九三五
 ザチキム(正義派)……………五七三
 サーハ——朝……………四五四
 サボレ……………「——一世」二七
 八八、——の四侵、七九四、——の内治、八〇〇、租、八〇一
 サボレ……………「——二世」八一八—八二〇、八二三、八四〇

ザマ—の戦……………五〇三
 サマリア……………四四、五二、五五
 サムニウム—の役、二八〇—二八六、—第四役、二九三、
 サラセン……………「亞刺比亞を見よ」—時代、九二二—
 〇〇〇、—帝國の封域、九四六、—四班牙を平ぐ、九五六
 —、—コンスタンチノブル攻圍、九四〇、九五八、—ミフラ
 ング、九六〇、—帝國の分裂、九九一、九九五、—九九七
 サラツシヨトラ—の教……………六九
 サラミス—の戦……………一五三
 サルゴン(サルキン)……………五五—五八
 サルダナパリス……………八〇
 サルヂス—の陥落……………一〇〇
 サンガ—朝……………三一一
 僧法學派(數論)……………三〇四

三皇……………三一五
 三桓「魯の—」……………三五一、三五二
 三國—の比較、七〇九、—の衰頽、七一四、—の終末、七一八
 三十僭主「雅典の—」……………一八二、一八三
 三十僭主「羅馬の—」……………七九七
 三晋……………三五五—三五七
 三藏結集……………三二〇、三二一、四五三
 三頭政治……………六一七
 山東同盟「漢末の—」……………六九八
 サンドラクダタ……………二三七、三〇八
 三武一宗—の難……………七五八
 蠶卵—の四傳……………八七〇

シ

シア(—派)……………九二四
 耆那(—派)……………三〇五
 周……………の起、三三四
 —一般の交代、三三五、—の封建、三二六、—の制度、三二
 八、三二九、—の極盛、三三〇、—の共和、三三二、—周
 の東遷、三三三、—室の衰亂、三五〇、四—の降亡、三七
 〇、東—の滅亡、三七一、—末の學術、三七一—三七六
 周「宇文氏」……………七七五、—
 齊の争、七七八、—齊を滅す、七七九、—の滅亡、七七九
 周亞父……………四〇二、四〇六
 柔然……………七四二、七四七、—魏の
 争抗、七五四—七七六、—突厥の争抗、七七六、七七七
 十二カエサル……………六七〇
 周瑜……………七〇一、七〇五、七〇六

シ

緡葛—の戦……………三三八
 舜……………三一八—三二〇
 釋迦牟尼……………三〇五、三〇六
 始皇帝……………三七一、三八一、帝權の擴張、三八一、—の施政、三八二
 —の南北經營、三八二、—の燔書坑儒、三八四、殽、三八五
 爾朱—氏の變……………七七〇、七七一
 鄧支……………四二八
 シスナガ朝……………三〇四—三〇八
 七賢「希臘の—」……………一三〇
 七賢「竹林の—」……………七二〇
 七國—の難「漢」……………四〇一、四〇三
 七雄「戰國の—」……………三五八、三五九、三六〇
 シタン……………三五
 支那……………人文の起源、三一三、洪水及工事、三

一八、三一九、奇契の起源、三三四、「以下歴朝の項下を見よ」

指南車……………三二六

司馬懿……………七二二、七二四、七二五

司馬炎……………七二七—七二九

司馬昭……………七二五—七二七

司馬遷……………四一八、四一九

シッフィン……………九三七

シラクサイ 一五八、一七六、二七四—二七八、二八八、二八九

志利亞……………「—王國」—の閉起、二三三

二二九、—の内情、二四七、—の内亂、五一〇、—羅馬
の交戦、五一九、五二〇、衰微、五二一、—の滅亡、五八七

商鞅……………三六一

蕭何……………三八六、三八九、三九八

蕭道成……………七六二、七六三

シャマシユシムキン……………七六一—七八

シャルマチセル「—二世」……………四四、四七

シャルマチセル「—四世」……………五四

シャルバルズ……………九二七

シャル、マルテル……………九六〇、九六一、九七〇

シャル、マンニニカール大帝を見よ」

シャロン—の戦……………八四六

諸葛亮……………七〇四

—七〇七、劉相となる、七〇八、北伐、七一—、薨去、七二二

蜀「三國の—」……………七〇

八、—吳の運衝、七二〇、—の頽勢、七二四、滅亡、七一八

蜀「後—、後漢を改む」……………七二五、七三三、七三四

晋「春秋の—」……………三三三、三四三、文公の世、三四四

晋「司馬—」……………突を滅す、七一八、八王の亂、七一

九—七二二、四—初世の氣風、七二二、四—の滅亡、七二八

秦……………三三一、三三三

—室の南渡、七二九、東—王氏の難、七三〇、東—秦を
破る、七四〇、東—の内亂、七四四、東—の滅亡、七四九

三、—晋の關係、三四四、穆公の世、三四五、孝公の世、三六〇、
昭襄王の世、三六六、四方の攻伐、三六八—六九併呑、三八〇
—の三十六郡、三八二、—の制度、三八二、の滅亡、三八七

秦「苻—」……………七三五、盛世、七三六、—燕を亡
す、七三七、—涼を滅す、七三八、—の強大、七三八、—
晋の戦、七三九、七四〇、—の分裂、七四〇、滅亡、七四一

秦「姚—則、後—」……………七三五、七三六

七三九、七四〇、盛世、七四六、衰微、七四七、滅亡、七四八

秦「四—、乞伏氏」……………七四一、七四三、七五一

春秋—時代……………三三五—三五五

シンナキリブ……………五九、六〇、六三

神聖第二—役……………一九九

神聖羅馬帝國「羅馬帝國及フランクを見よ」

隋……………七七九

推恩令……………四〇一

スキピオ(コルネリウス)……………四九四、四九五、四九九

スキピオ(クチウス)……………四九四、四九八、四九九

スキピオ(—アフリカヌス)……………五〇〇—五〇四、五二〇、五二三

スキピオ(—アジアチクス)……………五二〇

スキピオ(—少アフリカヌス)……………五三七、五四六

スサ—の陥落……………二二二

ステリコ……………八三三、—八三五

ストア(—派)……………二五二

ストラスブルグ—條約……………九八五

ストラテクス……………二〇二

スバルタ……………一二七、一三〇、一七〇、一七二

スバルタクス……………五八二
 スプリウス(カツシウス)……………二六四
 スメル・アカド……………一〇
 スルラ……………(ホルネリ)
 ヲス……………(五五一、五五三、五六一、東方戦争、五六三、伊太利を服す、五六四)の虐殺、五六六、の寡権、五六七
 スレナス……………五九九―六〇一

セ

齊「春秋戦國の」……………三二六、三三九、桓公、三三九―三四二、田、三五七、三五九、燕の報復、三六七、の滅亡、三八〇、
 齊「南」……………七六三、初世、七六六、滅亡、七六七
 齊「北」……………七七四、周の争、七七八、滅亡、七七九
 西域……………

漢の——小國、四〇五、漢を絶つ、四四六、——後漢に歸服す「班超を見よ」、——の離畔、四六四、——魏に通ず、七五五
 清談……………七二一
 成帝「漢の」……………四三〇
 成帝「拓跋魏の」……………七六一
 井田……………三二六
 成王「周の」……………三二七―三三九
 昭帝「漢の」……………四二一、四二二
 昭烈帝「劉備を見よ」……………
 召陵——の盟……………三四一
 石虎……………七二八、七三一、七三二、七三四
 赤眉——の賊……………四三八、四四一
 赤壁——の戦……………七〇五
 石勒……………七二六、七二七
 ——の自立、七二八、——劉趙を亡ぼす、七三一、卒、七三二

セチ……………二三
 セナツス……………二五九
 セ子カ……………六五三
 ゼノ……………八五四、八五五
 ゼノヒア……………七九九
 セミラミス——の傳説……………四八
 セヤヌス(リキウス・エリウス)……………六四五
 セゾルス(セプチミウス)……………六八六―六八九
 セルトリウス……………五八一
 セル井ウス——王の新法……………二五九
 セレウクス……………
 ニカトル「二三九、二三二―二三三、二三六―二三九、二四三
 セレウクス」——カリニクス……………五一一、五二二
 ゼロット(附設)……………六六四

刊漢……………三五三
 戦國——時代……………三五九―三七六
 ゼンダエスタ……………六九、七八七
 宣帝「漢の」……………四二
 三、内治、四二四、外交外征、四二五―四二九、租落、四二九
 前廢帝「南宋の」——劉子業を見よ、
 鮮卑……………四二
 二、興起、四七七、慕容、宇文氏、七二三、拓跋氏、七二五
 宣武帝「拓跋魏の」……………七六八
 宣王「周の」……………三三二

ソ

楚……………
 三四七、莊王の世、三四七、襄王の世、三四八、滅亡、三八〇

楚「項籍を見よ」
 宋「南」………三四三
 宋「南」——魏の對峙、七五〇、——の南疆綏撫、七五六、——の
 内治、七五七、——の泰平の真相、七五九、——の滅亡、七六三
 ソキ——戦争 …… 五五七—五五九
 ソクラテス …… 二五〇
 蘇秦 …… 三六二、三六三
 ソフィスト …… 二四九
 ソフェニム …… 四七九
 ソフォクレス …… 二五三
 ソロアステル …… 六九
 ソロモン …… 四一
 ソロン …… 一三三
 孫堅 …… 六九六、六九八、六九九

孫權 …… 七〇二、七〇四—七〇七、七一
 孫策 …… 七〇〇—七〇二
 ソンナ(—派) …… 九二四
 孫贖 …… 三六二
 タ
 タアルカ …… 六〇、七四
 タアレス …… 九二、一四二
 大章車 …… 四六五
 太武帝 …… 夏をうつ、七五〇、北凉北燕を滅
 す、七五二、——柔然と戦ふ、七五四、七五五、四城を服す、
 七五五、佛教を迫害す、七五八、南侯、七六〇、租、七六一
 湯 …… 三三二
 黨錮 …… 四七四、四七五

黨人 …… 四七三
 刀敕 …… 七六七
 道武帝「拓跋魏の——」 …… 七四二、七四三、七四七
 タキツス(コルネリウス) …… 六三五
 タギナ——の役 …… 八八二
 ダチス …… 一四七
 ダマスキス——哈利發朝 …… 九四〇
 ダヤウク(—家) …… 八一
 ダラ——の箕都 …… 五一二
 ダラヤウシ …… 一〇七、九州の
 叛を平ぐ、一〇八、内政、一一一、北征、一二四、租、一五一
 ダラヤウシ(—ノツス) …… 一七九
 ダラヤウシ(ダリウス・ゴドマクス) ……
 …… 二〇五、二〇九、二一一、二一四
 ダリウス・ヒスタスヘス「ダラヤウシ」を見よ、

タリク …… 九五五、九五六
 タルキニウス …… 二六二
 タレンツム羅馬——と争ふ …… 二九〇
 檀石槐 …… 四七七
 檀道濟 …… 七四八、七五〇、七五一、七六〇
 夏父 …… 三二四
 チ
 紂王 …… 三三五
 チオクレチアヌス ……
 …… 八〇二、八〇三、——波斯とアルメニアを争ふ、八〇四
 チオニシウス …… 二七五—二七八
 チクタトル …… 二六二

チクラトピレセル……………三三
 チクラトピレセル「二世」……………五一、五三
 チクラテス……………五七八―五八〇、五八四―五八七
 チクラノケルタ……………五八〇
 チッサフェルテス……………一七七、一八〇、一八五、一八六
 チツス(フラギウス)……………六六七―六六九
 チベリウス……………六三二、北征、六四
 ○、即位、六四一、―バルチアと争ふ、六四八、租、六四九
 チモレオン……………二八八
 長安……………三三〇
 張角……………六九六
 張儀……………三六三―三六五
 張騫……………四〇八、四一二
 龜錯……………四〇二

張湯……………四二〇
 張良……………三八三、三八九、三九九
 チリダテス「アルサケス二世を見よ」……………六四七、六四八
 チリダテス「アルメニアの―」……………三五、四〇、―エル
 チールス……………四一、―の攻圍、八八、―の陥落、二二〇
 陳……………七七五、七七八、七七九、七八〇
 ツ
 ツェウクシス……………二五四
 ツキヂデス……………二五二
 ツイトモシス(トローメス二世)……………二〇
 ツイトモシス「三世」……………二二

ヅルス、(―ゲルマニクス)……………六三三、六三四
 ツルタン……………五一

テ

鄒……………三三三、莊公の世、三三七、三三八
 趙……………三五六、三七八、三八〇
 趙「前趙、劉氏」……………七二五、七二九、七三一
 趙「後―、石氏」……………七三一、七三四
 趙高……………三八五、三八七、三八八
 テウデベルド……………八七八、八八一
 朝鮮……………三二七、四一四
 テオクラテス……………二五四
 テオダアド……………八七五―八七七

テオドシウス……………八二九―八三三
 テオドシウス「二世」……………八四〇、八四一、八四四、八四五
 テオドツス……………二四八
 テオドリク「四ゴトの―」……………八三八、八四五、八四六
 テオドリク「東ゴトの―」……………東羅馬に貢た
 リ、八五三、セノ帝と―、八五四、伊太利征服、八五五、八五
 六、内治、八五六、外交、八五七、八五九、末年及殞落、八六〇
 テオドリク(―ストラボ)……………八五三―八五五
 テクム并リ……………二六五
 テーベ……………の七戦騎、二二〇、―の民政、一八九、―の盛時、一九〇
 テマイエスタテ……………六四四
 テミストクレス……………一四八、一五〇、一五二、一六〇
 テメトリウス(―ファレウス)……………二二九、二三五
 テメトリウス(―ポリオルケテス)……………

デモステネス……………三三二、三三五、三三六、三三八—三四二
 デルフォス……………一三六
 テルモピラエ—の戦……………一五二
 デロス—同盟……………一五九
 田齊「齊を見よ」……………三五七
 田單……………三六七

ト

鄧—氏の變……………四六四、四六五
 鄧禹……………四四〇—四四二
 寶憲……………四五八、四五九
 鄧隆……………四六五

寶融……………四四二、四四三
 屠耆王……………三九五
 突厥……………東
 方との關係、七七〇、七七七、七七九、羅馬との通交、九〇〇
 トチラ……………東
 東ゴトの克復、八七八、八八〇、末路、八八一、敗死、八八二
 トートメス—「一世」……………二〇〇
 トートメス—「二世」……………二二二
 ドミチアヌス(フラギウス)……………六六九—六七二
 吐谷渾……………七五一
 ドラコ……………一三三
 トラシメチス—の戦……………四九六
 トラヤヌス(マルクス・ユルピウス)……………の東北經營、六七二、—
 の内治、六七三、—の東征、六七六—六七八、殂落、六七八

ニ

トリプニミリタレス・コンストラリ・ポテスタテ……………二六七
 トリファン……………二六三
 トリポニアヌス……………八九四、八九五
 ドルス、(リギウス)……………五五六、五五七
 トロイア—の役……………一一二

ナ

ナブク—ゾルズル(チナカドレツザル)……………八四、九三
 ナブナヒド……………一〇二
 ナパベルチクリ……………七八
 ナポリ—の瓶置……………二八三
 南粵……………四一一、四一二
 南北朝「支那の—」……………七五三—七八三

ニオ・プラトン—派……………二五二
 ニカの變……………八六七、八六八
 ニキアス……………一七三、一七六
 ニケフォルス……………九八一—九八三
 ニシピス—の戦……………六九〇
 日蝕—の役……………九一
 二世—帝「秦の—」……………三八五、三八七
 ニチエ—合盟、六四、—の陥落、八四、—府址の戦、九一一、
 ニブル(ニムロフ)……………一〇
 尼夜耶(—派)……………三〇四

子

子アルクス……………二一九、二二〇

子コー「二世」……………八三、八五

子ルヴ(マルクス・コッケイウス)……………六七二

子ロ(クラウヂウス)……………五〇〇

子ロ(クラウヂウス)……………六五三、六五九—六六一

年號——の起源……………四一六

ハ

覇……………者、三三五、五—、三三六、—者の論、三五五

彭越……………三八九、三九一、三九七

パウサニウス……………一五五、一五八

褒姒……………三三三

白起……………三六八—三七〇

縛達……………の初始、

九六五、—の盛世、九八〇、—の文化、九八九、九九〇

バクトリア……………二四八、四〇七、四五一、五一四、五二九

バコルス「二世」……………六七五、六七六

バコルス……………六一九—六二一

ハサルガクエ……………九六

ハッサン……………九三六

ハシエム—家……………九一六

バシル「一世」……………九九九、—法典、一〇〇〇

ベアス、(エンチヂウス)……………六二〇

ハスドルバル……………四九三、四九八—五〇〇

ハスドルバル(—ギスコ)……………四九九、五〇二

跋陀麻那(善那)……………三〇七

バタリアトラ(華子城)……………三〇七

八王晋の—の亂……………七一九

バトリキウス……………二五九

バビロン……………古巴比倫尼亞、一八、二七、

—の亂、五七、五九、六一、新王國の建設、八五、—城、

九三、—王國の内訌、一〇一、—の陥落、一〇三、二二二

ハミルカル……………四八八、四征、四九〇、西班牙經營、四九二

馬鳴……………四五二

婆羅門……………三〇一

哈利發……………九二四

ハリカルナッス—の陥落……………二〇八

バルセポリス……………一一三、—の焼亡、二二三

バルタマシリス……………六七六、六七七

バルチア……………—の建國、二四八、—

—の興隆、五一二、五二九、制度文物、五三一、フラアテスの

世、羅馬との對峙、六三七、試習内訌、六四二、六四三、—

羅馬とアルメニアを争ふ、六四八、六四九、六五七、六五八、

フラギウス朝との隣交、六七四、六七五、—漢に通ず、六七

六、—の文化、六九一、六九三、—大王國の組織、七八四

バルヂヤ……………一〇五

バルメク(—家)……………九六六、九八〇、九八一

ハルモヂウス……………一三八

ハルン・アル・ラシド……………—の盛世、九七九、—

カール帝に逆す、九八〇、—の晩年、九八二、殞落、九八二

班固……………四六〇

范增……………三八八、三九一

范睢……………三六八—三七一

パンチャラ……………三〇〇

班超……………四四七、四五〇、四六〇—四六三

パンデクテ……………八九五

ハンニバル……………二七四
ハンニバル四九三、東征、四九四、羅馬侵襲、四九五、四九六、南伊太利の経略、四九六、—の退却、四九八、カルタゴに於ける、五〇二、五〇三、亞細亞に走る、五一九、没、五二三、

ヒ

ヒクサウス(ヒクソス)……………一五二〇
ヒザンチウム……………一二六、—帝室の世、八五二
滌水—の戦……………七三九、七四〇
ヒスタクス……………五三二
ヒステアイオス……………一五、一四三、一四五
ヒタゴラス……………一六三
ヒトン……………二二九、二三〇
ヒッピアス……………一三八、一四一、一四八

ヒビン(少王)……………五七〇、五七一

ヒミルコ……………二七五—二七七

ヒメラ—役……………一五八

ビル、ス……………二九一、二九二

閩粵……………四二二

頼婆娑羅……………三〇四、三〇六

フ

武乙……………三三四
フォエニケ……………—の興起、三四、—の商業、三七、—の國風、民情、三八、—の教學、四〇
傅介子……………四二二
フォキオン……………二二九

苻堅

—の江北統一、七三八、—の南征、七三九、殂、七四〇

巫蠱

……………四二一

夫差

……………三五三、三五四

扶蘇

……………三八五

佛教

南方—、四五三、北方—、四五三、—の東流、四五、晋代江北の—、七四六、魏の太武帝—の迫害、七五八、魏の—の再興、七六八、七六九、梁の—の盛、七七二

武帝

—の再興、七六八、七六九、梁の—の盛、七七二

武帝

—の再興、七六八、七六九、梁の—の盛、七七二

武帝

—の再興、七六八、七六九、梁の—の盛、七七二

武帝

—の再興、七六八、七六九、梁の—の盛、七七二

武帝

—の再興、七六八、七六九、梁の—の盛、七七二

パトレマエウス(—ソッテル)……………二二六、二二八、二二三、二三五、二三六、二三九、二四二、二四三

パトレマエウス(—エエセゲテス)……………五一、五一六

パトレマエウス(—フィラデルフス)……………二四三、二四八、二九二、

パトレマエウス(—フィスコン)……………五二七、五七一、五七二

パトレマエウス(—ラチルス)……………五七二、五七四、五八〇

フアドール……………九八八、九八二

フラァテス「—二世」……………五六九—五七一、五七五

フラァテス「—四世」……………六二二、六三六

プラテア—の役……………一五五

プラトン……………二五一

フラミニウス……………四九五、四九六

フラミニウス(—キンクサウス)……………五一七、五二〇

フラ井ウス(—家)……………六六七—六七一

ファラオー	六
フランクス(方陣)	一九八
フランク	一九八
.....の南侵、七九六、.....の興起、八五七、八五八、.....	
伊太利の侵襲、八七八、.....王と西ゴト通婚の害、九四七、.....	
九五〇、.....の内情、九五九、.....サラセンの對抗、九六〇、.....	
.....王国の隆昌、九七四、.....帝國の分裂、九八四、九八五、.....	
ブリタニア羅馬の——征討、.....六五二、六五三、六七〇	
フリリサエ	五七三
フリリッポス	一九七—二〇四
フリリッポス	五二五—五二七、五二四
ブルガリア——人の南下	八八七
ブルツス	六一三—六一五、六一八
ファルサリス——の戦	六〇七
ファルナバツス	一七九、一八七、一九一
アレトル	二六二
ブレプス	二五九
ブレノヌス	二四四、二六九、二七〇
ファイル	一三九
ブロンタゴラス	二五〇
武王「周の——」	三三五—三二七
武王「楚の——楚を見よ」	
ブン	八二八—八四八
ブンヤヤブ	二九八
文宣帝「齊の——」	七七七、七七八
文帝「漢の——」	四〇〇
文帝「隋の——」	七七九、七八〇
文王「周の——」	二二四、三二五

へ

兵家	三七五
ヘイシストラツス	一三五—一三七
平準官	四二〇
平王	三三三
ヘシオドス	一二五
ヘツェラ	九二〇
ベツス	二二四、二二五
ヘラクリウス	九一〇、九三三、九五七
ヘリアエ	一三四
ヘリオクレス	四〇七
ヘリオキ	一二七
ヘリクレス	一六七、一六八、一七一
ペリサリウス	南征、八七一、八七二、四征、八七六、
ヘルセウス	八七七、東ゴトを屈す、八七八、東歸、八八一、没、八八八
ヘルガムス——の獨立	二四四
百兒士亞人、九
.....王統の分立、九七、.....國都、一一三、.....王國の盛	
.....時、一二六、四征、一四六—一五六、.....四征の結果、一六二	
波斯「薩登朝を見よ」	
ヘルセウス	五二四—五二六
ベルタスト	一八八
ベルヂツカス	二二五—二二七
ヘルマン	六四〇—六四二、.....廟 六四二
希臘「クレシアを見よ」	
ヘレノタミエ	一五九
ヘロト	一二七
ヘロド	六三八、六四七
ヘロドツス	二五二

ヘロピダス……………一八九
 ペロポンテス、— 役……………一六九
 ホ、
 ホエテウス……………八五六、八六〇
 ホエニ……………第一—役、四八四—四八九、第
 二—役、四九三—五〇三、第三—役、五三五—五三七
 墨翟……………三七五
 穆王……………三三一
 ホセイン……………九四〇、九四二
 冒頓……………九三五
 ホニファキウス……………八四二、八四三
 ホノリウス……………八三三—八三七

法家—の學……………三七五
 ポプルス・エンニアヌス……………五四一
 ポムペイウス……………五六五、五八一、五八二、執政となる、五
 八三、東征、五八六—五八九、執政、五九七、五九八、羅馬の
 主權を得、六〇四、—カエサルの争、六〇五、羅馬國の東南
 半を得、六〇六、敗滅、八四二、八四三、—の殘黨、六〇九、
 ホメリス……………一二四、—時代一二二
 慕容廆……………七三三、七三六、七二八、七三二
 慕容皝……………七三二、七三三、七三五
 慕容垂……………七三六、七三七、七四〇—七四二
 ホラキウス……………五四二
 ホラチウス(フラックス)……………六三五
 ボリスベルコン……………二二八、二三一、二三四
 ポリビウス……………二五二
 ボルス……………二一六

マ

マアゴーク……………七六、八二
 マウリチウス……………九〇三、九〇七
 マギ……………九五、—の變一〇七
 マキシミヌス……………七八九—七九〇
 マキシムス……………四九六—四九八
 マグナ・グレシア……………二七五
 マケドニア……………一七〇、一九六、—王國の滅亡、五二六
 マーケリイ……………二一
 マゴ……………一五七
 マゴ……………二七八
 マゴ……………四九四、四九八—五〇三
 マダイ「メデアを見よ」……………六八
 マヅダーク……………八六三—八六六

マニ……………八〇〇
 マハ・ペーラタ……………三〇〇
 マハルバル……………四九六、四九八
 マホメット「ムハメッドを見よ」
 マムン……………即位、九八二、内亂
 定、九八八、非可蘭、九八九、學術獎勵、九九〇、殞、九九一
 マメル—監……………二九〇、四八三
 マラトン—役……………一八四
 マリウス……………五四六
 五五—五五五、五六一、—の虐殺、五六二、死、五六三
 マリウス……………五六五
 マルツバイン……………八八四、八八六
 マルドニウス……………一四六
 マルドニウス……………一五四、一五五

ミトラダテス「一世」……………五二九
 ミトラダテス「二世」……………五七六、五七八
 ミトラダテス（—ザオニッス）……………
 ……五五九、五八三、五八四、五八七、五八八
 弭曼薩—派……………三〇五
 ミルチアデス……………一二五、一四六、一四八、一四九
 ム、
 ムキアヌス……………六六五、六六六
 ムサ……………九四六、九五四—九五六
 ムハマド（麻訶末）……………九一
 七其教九一九、—の宣教、九二〇、メツカの逃亡、九二〇、—
 —の亞刺比亞征服、九二一、—の入滅、九二三、—教団「サ
 ラセンを見よ」—教団哈利發朝の終末、一〇〇一、一〇〇二

名家……………三七五
 明帝「後漢の—」……………四四八
 明帝「曹魏の—」……………七二〇、七二三、七二四
 明帝「劉宋の—」……………七六二
 明帝「南齊の—」……………七六七
 メエルダテス……………六五五、六五六
 メガクレス……………一三三、一三六
 メツカ……………九一六
 メギッド—の役……………二二二
 メケナス（キルニッス—）……………六二六、六三二、六三六
 メデア……………八、六八、—の發祥、八一、—亞
 述に克つ、八五、—リザアの戦、九一、—の滅亡、九九
 メデオラヌム（ミラン）……………八〇五

メヂナ……………九二〇
 メナ……………七
 メナエム……………五二
 メムノン……………二〇六
 メンチフェル（メムフィス）……………七
 メントル……………一九五
 モ、
 モア非ア……………九三一、九三六—九四〇、九四三
 孟軻……………三六六、三七四
 孟嘗君（田文）……………三六六
 モタシム……………九九二
 毛利耶—王朝……………三〇八—三一

モンズ・サケル（聖丘）……………三六四
 ヌ、
 ヌグルター……………五五〇、五五一
 猶太……………—人の起原、
 一三、—人の出埃及、二五、—の分裂、四四、—バール
 教の亂、四五、—二王國の衰運、五二、—の騷動、六六四
 ヌスチニアヌス八六六、八六八、内治と土木、八六九、八七〇、
 外交と外征、八七〇—八七八、殞落、八八八、當代の地震疫疾、
 八八八、法典編纂、八九五、八九六、その内容、八九七—八九九
 ヌスチニアヌス「二世」……………九五六、九五七
 ヌリアヌス……………八一九、即位、八二〇、—對基
 督教、八二二、—の波斯征伐、八二二、—の戦没、八二三
 ヌリウス—將……………六一二

ラ、

- 老子……………三七三
- 老上……………四〇四、四〇六
- ラエンナ……………四羅馬の帝都、八三四―八三六、
―の園、八五六、東ゴトの都、八六一、外藩王の都、八八四
- 洛陽……………三三〇
- ラケデモン「スベルタを見よ」……………一〇一
- ラデガスト……………八三五
- 羅甸大―役……………二八〇―二八二
- ラフィア―の役……………五六
- ラマヤナ……………三〇三
- ラムセス―二世……………二四

リ、

- 劉安……………四一七
- 劉淵……………七二五、七二六
- 劉秀「光武帝を見よ」……………四五三
- 龍樹……………七六二、七六二
- 劉子業……………四一七、四三〇
- 劉向……………七二〇、七二四、七二六、七二七
- 劉禪……………七二六、七二九
- 劉邦「漢の高祖を見よ」……………七二六、七二九
- 劉聰……………七二六、七二九
- 劉備……………六九七、七〇〇―七〇五、益州の經營、七〇六、七〇七、漢中王、七〇七、蜀帝、七〇八、殂落、七二〇
- 劉曜……………七二七―七二九、七三一
- 劉裕……………七四四、七四五、七四八―七五〇

- リキニウス……………八一〇―八一三
- 六朝……………七八一、―の文學、七八一―七八三
- リクルクス……………一二八
- リサンダル……………一八一、一八六
- 李斯……………三七九、三八七
- リシマクス……………二三七―二三九、二四三
- リヂア……………八九―九二、―王國の滅亡、一〇〇
- 梁―氏「後漢の外戚」の變……………四七一、四七二
- 梁……………七六七、―の治平、七七二、―の侯景の亂、七七三、―室の亂、七七四、後―、七七四、梁の滅亡、七七五
- 涼「前」……………七二九、七三一、七三四、七三八
- 涼「北」……………七四三、七四九、七五二
- 涼「南」……………七四三、七四七、七四九
- 涼「西」……………七四三、七四九

- 涼「後」……………七四三
- 絲林―の賦……………四三八
- 輪台―の詔……………四二一
- 林邑……………七五六

ル、

- ルキリウス……………六三四
- ルクァルス(リキニウス)……………五八四、五八五
- ルクレチウス……………六三四
- レ……………四七四、四七六

グレンチニアヌス「三世」……八四二、八四五、八四八
グンダル……八

一七、亞非利加による、八四二、八四三—の滅亡、八七二

世界史上巻索引終

世界史上巻 正誤

頁	行	誤	正
一二六	六	ヒサンチウム はメガラに	ヒサンチウム(ヒサン チオン)はメガラ人に
二四五	三	之ヲ知り	之を知り
二四七	四	アンチオクス	アンチゴナス
二六〇	四以下	千五百驢	千五百アス
二七六	三	シラクセ	シラクス
二八九	一四	ミキリア	シキリア
二九六	上	耶印度	印度
三〇三	上	ラマヤ	ラマヤナ
三三三	上	周定	周室
三六二	八	燕	燕
三八〇	上	六可	六國
三九六	上	異姓	異姓
四三一	上	王綺	王莽
四四八	上	汗河分流の工	汗河分流の工事
全	全	對外來	對外策
五〇六	上	度制	制度
五一九	一	ハンベル	ハンニバル
五一九	二	第二役	第一役
五七三	一	胤落	落胤
五八一	一二	ミトラグテス	ポンツスのミト ラダテス
六〇〇	四	アフルガルス	アアガルス
六〇九	二	ユバ	ユバ

頁行	誤	正
六二六	遺産	遺産
六三五	作始	始作
六三六	チリデテス	チリダテス
六四二	ゲルハニクス	ゲルマニクス
六五五	メエルチテス	メエルダテス
六八六	クロヂウスア ルピヌス	クロヂウスア ルピヌス
七二〇	荷威	荷威
七二四	司馬懿	司馬懿
七三二	後趙の石	後趙の石虎
七三六	治と兼併内	内治と兼併
七七一	字は黒瀬	字は黒瀬
七七五	周西梁	周西魏
八一九	以	以

頁行	誤	正
八三三	亂東羅馬	東羅馬
八三七	遺志を加へて	遺志をかへて
八四一	サボール	サボール
八四五	威伏	威服
九〇七	帝は	マウリチウス帝は
九二一	亞制比亞	亞刺比亞
九六四	亞非亞利加	亞非利加
九六五	轉移	轉封
九六六	アパス	アッパス
九八二	マムル	マムン

以上は肝要なる誤脱の心附きたるのみ掲げたり、此他尙正し
漏したるもの少からざる可きも、精訂の間を得ざるを以て他日
再刊の機を期す、
校者

明治卅四年七月二十日印刷
明治卅四年七月二十日發行

定價金壹圓六拾錢

不許複製

著者 坂本健一

發行者 大橋新太郎

印刷者 佐久間衡治

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舎第一工場

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

世界史



上下二冊 洋裝金文字入美本
上卷紙數千三頁余、下卷同千二百頁余
上卷定價金壹圓六拾錢 日方四百日

文學士坂本健一君著

上下幾千載の興亡は常に世界的統一の趨勢を示し最近に至り凡百の事相殆んど世界的となる嘗て西人獨あるや文明を重しとなし偏に歐米列強を説きしは狭し亞細亞文明あり教學あり昔匈奴蒙古土耳其古の西せしは今英露其他の東するが如し東亞の老帝國は近く世界的大競争場たらん世界史中東洋豈輕しとせんや殊に今の時に方りて東洋新興隆の我國民が史的智識に基て世界的感想を養ふを要するや言を俟たず是を以て古今東西を通叙して聊國民に薦めんとするは既出邦文世界史中に於て稍詳密を得たる本書編纂の目的なり尙多少讀者の参考となるあらば望外の幸なり乞ふ史學家は勿論學生一般に御愛讀あらんとを。

博文館發兌歷史書類

- | | | | | |
|------------|----------|------|---------|--------|
| 文學博士萩野由之君著 | 大日本通史 | 上卷 | 正價壹圓五十錢 | 小包四百匁迄 |
| 文學博士有賀長雄君著 | 增訂帝國史畧 | 全一冊 | 正價壹圓五十錢 | 小包四百匁迄 |
| 落合直文君共著 | 新撰日本外史 | 全一冊 | 賣價壹圓二十錢 | 小包四百匁迄 |
| 文學博士萩野由之君著 | 日本歷史評林 | 上下二冊 | 正價壹圓五十錢 | 郵稅二十錢 |
| 林羅山先生共著 | 朝通鑑 | 八十四冊 | 正價拾壹圓 | 運費五十錢 |
| 文學博士萩野由之君著 | 日本歷史 | 上下二冊 | 正價壹圓十錢 | 郵稅十六錢 |
| 文學博士萩野由之君著 | 日本歷史要解 | 全一冊 | 正價五十錢 | 郵稅六錢 |
| 文學士木寺柳次郎君著 | 日本歷史 | 全一冊 | 正價五十錢 | 郵稅拾錢 |
| 松井廣吉君著 | 新大日本帝國史 | 全一冊 | 正價四十錢 | 郵稅十錢 |
| 足立栗園君著 | 通俗日本歷史 | 全一冊 | 正價二十五錢 | 郵稅八錢 |
| 増田于信君著 | 新撰日本小歷史 | 全一冊 | 正價十五錢 | 郵稅六錢 |
| 内藤耻叟君著 | 德川十五代史 | 一二冊 | 正價五十錢 | 郵稅十二錢 |
| 小宮山綏介君著 | 德川太平記 | 上下二冊 | 正價壹圓五十錢 | 小包八百匁迄 |
| 岸上操君著 | 通俗德川十五代史 | 全一冊 | 正價二十五錢 | 郵稅八錢 |

博文館發兌歷史書類

文學士木寺柳次郎君著	文學士木寺柳次郎君著	文學士吉國藤吉君著	長谷川誠也君著	博文館編輯局編纂	文學士幸田成友君著	高田早苗君著	石井勇吉君著	山本利喜雄君著	恒屋盛服君著	白河大郎君著	國府種徳君著	近藤瓶城君著	大槻東陽君著	安藤定格君著	山名善讓君著
中等教育東洋歷史	中等教育西洋歷史	西洋歷史	通俗世界歷史	十九世紀史	英國現代史	朝鮮開化史	支那文明史	十八史畧評註	春秋左氏傳校本	史記讀本	通鑑	支那文學史	日本大文學史	日本風俗史	日本法制史
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
正價八十錢	正價七十錢	正價五十錢	正價二十五錢	特價二十五錢	正價五十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢	正價二十錢
郵稅十二錢	郵稅十二錢	郵稅十錢	郵稅八錢	郵稅五錢五厘	郵稅十二錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢	郵稅十四錢

博文館發兌歷史書類

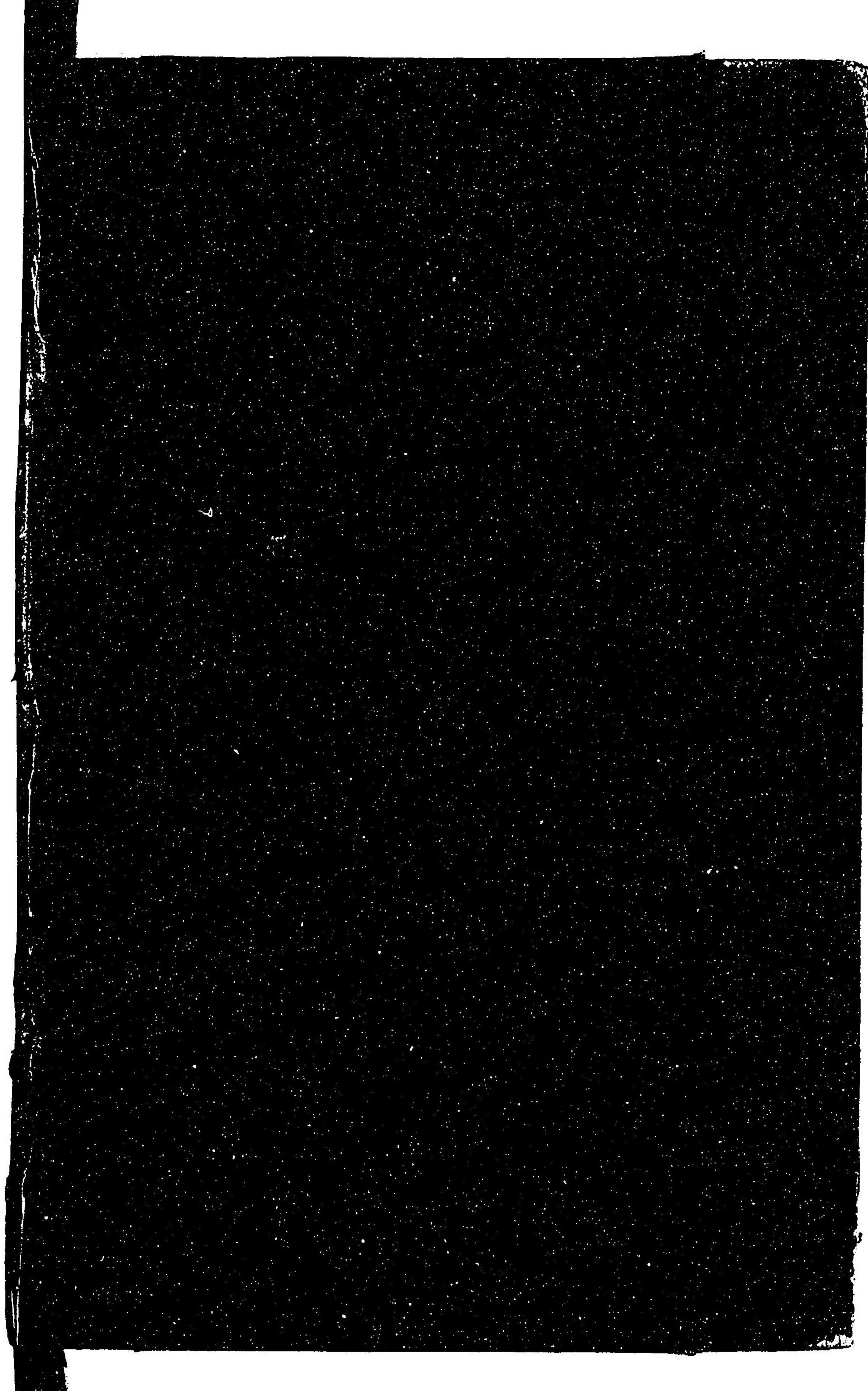
文學博士坪内雄藏君著	文學士征川種郎君著	大和田建樹先生著	文學士坂本健一君著	文學士三浦菊太郎君著	文學士中野禮四郎君著	木村應太郎君著	文學士蟹江義九君著	文學士加藤玄智君著	法學士森山守次君著	文學士高田早苗君著	松平康國君著	酒井雄三郎君著	法學博士有賀長雄君著
英國文學史	支那文學史	日本大文學史	日本風俗史	日本法制史	東洋教	西洋倫理學	西洋哲學史	世界宗教史	政治社會史	英國憲法史	英國國史	歐洲外交史	近時外交史
全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊
正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓	正價二圓
小包四百	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢	郵稅一冊八錢

類書史歷兌發館文博

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

藤田梁言君著 ● <small>中等支</small>	那史	七冊	正價壹圓	郵稅十錢
石川鴻齋先生著 ● <small>點五</small>	代史	八冊	正價壹圓四錢	郵稅十八錢
大和田建樹先生著 ●	新航萬國歷史	下二冊	正價十二錢	郵稅四錢
川崎紫山君著 ● <small>西</small>	南戰史	全壹冊	正價壹圓七十錢	郵稅六百及迄
松井廣吉君著 ●	英佛聯合征清戰史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
松井廣吉君著 ●	米國南北戰史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
澁江保君著 ●	普 奧 戰 史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
越山平三郎君著 ●	英 米 海 戰 史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
澁江保君著 ●	英 國 革 命 戰 史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
全	佛 國 革 命 戰 史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
國府犀東君著 ●	三 十 年 戰 史	全壹冊	正價十八錢	郵稅六錢
<small>六條隆子君共著 ●<small>中等支</small></small>	世界商業史	全壹冊	正價三十錢	郵稅八錢

23
24



23

246

000093-001-6

23-246

世界史

坂本 健一/編

1冊(上1004, 4
M34

ACA-0138



